

赤星直忠による 1947 年の横浜市薬王寺貝塚（称名寺 E 貝塚）発掘調査

千葉 毅*・釧持 輝久**・塩原 健***

Excavation at Yakuoji Shell Midden(Shomyoji-E Shell Midden) by
Naotada AKABOSHI in 1947

Tsuyoshi CHIBA, Teruhisa KENMOTSU, Takeru SHIOBARA

はじめに

薬王寺貝塚は、神奈川県横浜市金沢区寺前に位置する縄文時代後期を主体とした貝塚である。一帯には称名寺貝塚群が所在し薬王寺貝塚もその一つをなす。

このたび、赤星直忠による 1947 年の薬王寺貝塚での発掘調査における出土遺物および諸記録の整理を行ったので報告する。

なお、報告にあたっては動物遺体を釧持が、石器を塩原と千葉が、それ以外を千葉が担当した。

1. 称名寺貝塚群と薬王寺貝塚

薬王寺境内の貝塚の存在を最初に指摘したのは赤星直忠である（赤星 1926）。赤星は 1925 年 7 月に横浜市金沢区称名寺において縄文時代の貝塚を発見して以降、複数回にわたり称名寺周辺の踏査を行い、称名寺総門内や総門に南接する薬王寺境内に縄文土器および貝の散布があることを確認しており（赤星 1988、高橋 2015・2016）、1932 年には総門内で赤彩を伴う浅鉢形土器を表面採集している（註 1）（岡

* 神奈川県立歴史博物館 Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History, Yokohama, 231-0006 Japan

** 赤星直忠博士文化財資料館 Doctor Naotada AKAHOSHI Cultural Heritage Museum, Yokosuka, 240-0101 Japan

*** 明治大学文学部 4 年 Meiji University School of Arts and Letters

原稿受付 2020 年 1 月 29 日 横須賀市 博物館業績 第 752 号

Key Words: Shomyoji Shell Midden, Yakuoji Shell Midden, Jomon Period, Naotada AKABOSHI

キーワード: 称名寺貝塚, 薬王寺貝塚, 貝塚, 縄文時代, 赤星直忠

本 1984)。1933 年には石野瑛が総門付近において発掘調査をしている(石野 1933)。このように称名寺総門周辺の貝塚群に関心が向けられていた中で、薬王寺貝塚の発掘調査は戦後間もない 1947 年 1 月に実施された。赤星は三浦半島の先史時代遺跡についてのガイドブックを 1950 年に刊行している(赤星 1950)。文中では「金澤公民館前貝塚」「称名寺山門内貝塚」「薬王寺境内貝塚」の三か所を取り上げ、いずれも「後期縄文式土器」の「散布地」で「貝塚」を伴うとし、後二者は「金澤公民館前貝塚」の一部をなすものとして紹介された。

1951 年、1957 年には吉田格により縄文土器編年研究を目的とした発掘調査が称名寺周辺の 5 つの貝塚において実施された(吉田 1960)(註 2)。吉田は、称名寺一帯の貝塚群に対し A~G のアルファベットによる名称を付し、薬王寺境内の貝塚は称名寺 E 貝塚とした(註 3)(図 1)。以後、新たに発見された貝塚に対しても吉田の記号に連続するアルファベットが振られるようになる(註 4)。

今日では吉田によるアルファベット呼称が定着しているが、本稿では本遺跡の調査者である赤星の呼称に則り薬王寺貝塚としておく。

2. 薬王寺貝塚の出土品と調査記録

1947 年の赤星による発掘調査出土品は、現在、横須賀市自然・人文博物館(以下、「横須賀市博」とする)において整理箱 6 箱分(縄文土器、土製品、石器、動物遺体、土師器、須恵器、かわらけ)(註 5)、神奈川県立歴史博物館において骨角貝製品 3 点、赤星直忠博士文化財資料館において角製品 1 点が確認されている(註 6)。

また、赤星は遺跡調査、踏査等のメモやスケッチ、草稿等一通称「赤星ノート」と総称されている一を膨大に残しているが、それらの大部分は赤星の生前、1987 年に神奈川県立埋蔵文化財センターに寄贈された(現在は神奈川県教育委員会が所蔵)(神奈川県立埋蔵文化財センター編 1996)。一方、1987 年の段階で赤星が手元に残した一部のノートおよび県立埋蔵文化財センターへの寄贈後に執筆したメモ等は、赤星の没後に設立された赤星直忠博士文化財資料館にて保管されている。

1947 年の薬王寺貝塚発掘調査に関する記録は神奈川県教育委員会が保管する赤星ノートに含まれ(註 7)、調査時の野帳(以下「赤星野帳」とする。図 2~7、図 22~26)や報告文の草稿(以下「赤星草稿」とする。文章は未公表。)等がある。また、1947 年の調査時以外の踏査、採集メモが断片的に赤星直忠博士文化財資料館に保管されているノート(以下「赤星資料館ノート」とする。図 27)に認められる。

本稿は以上の記録等を基礎とし行った整理作業の報告となる。

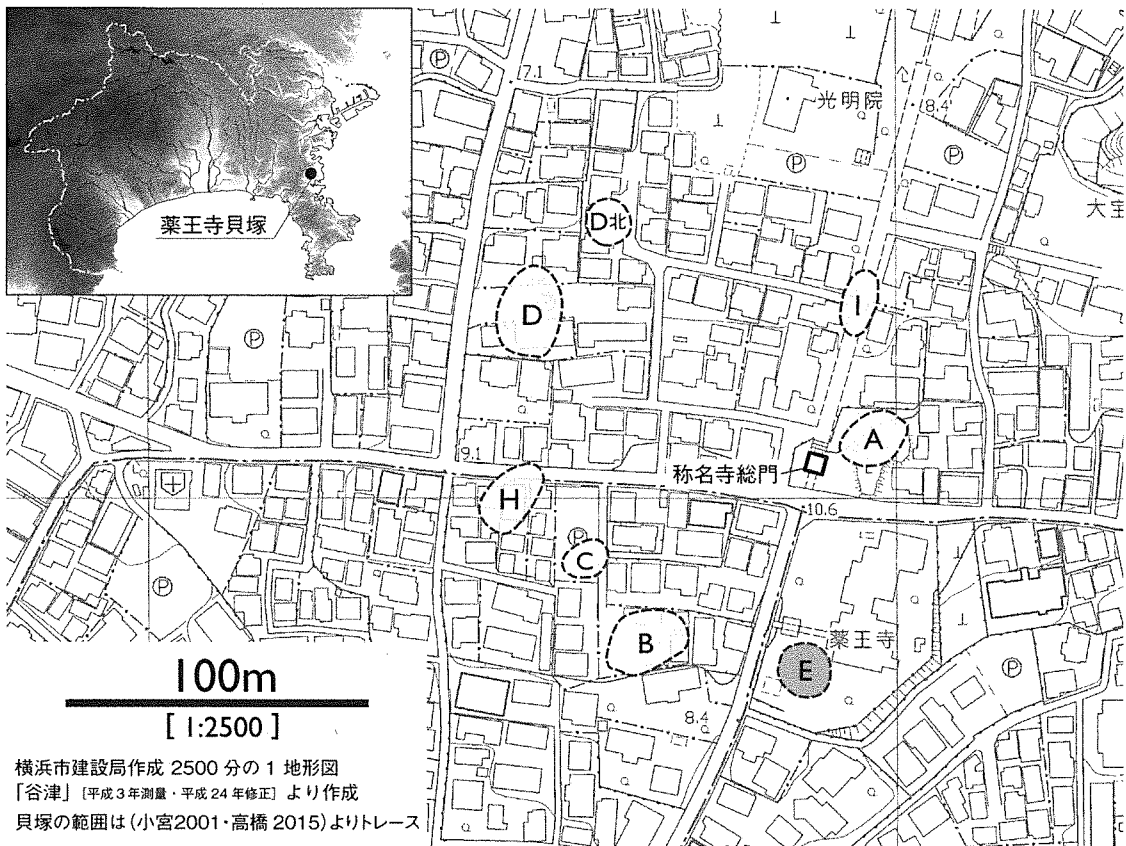


図1 薬王寺貝塚（称名寺 E 貝塚）と周辺の貝塚

3. 薬王寺貝塚各地点の概要

薬王寺貝塚の発掘調査は、1947年1月12日の踏査を経て同月26日に実施された。参加者は赤星の他、佐野大和、川上久夫、片桐健栄、草川勇、岡本勇、赤星劍二、安藤浩である。

貝の散布が確認されたのは薬王寺本堂西側の鐘楼周辺で、特に鐘楼東側に集中するが（図2、3）、範囲は狭く15m程に収まる（註8）。赤星は鐘楼周辺一帯に散布する貝について「鐘楼が築かれた時（鐘楼は天保11年であるから恐らくその時）、其の部にあった貝塚の一部が掘り起こされたもの」と推測している。

発掘調査は、散布地の中でも貝、遺物の散布が集中する5地点について行われた（図4）。調査方法については記録がないが、A地点、B地点については図5～7のように断面図が作成されていることからトレンチ等を設定して掘削していることが推測される（註9）。C～E地点は断面図がない。以下、主に赤星草稿や断面図等を参照しながら各地点を概観してみよう。

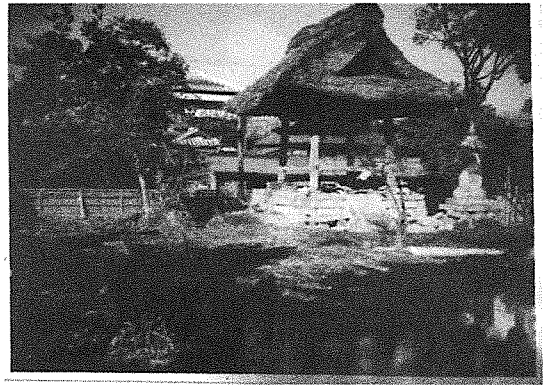
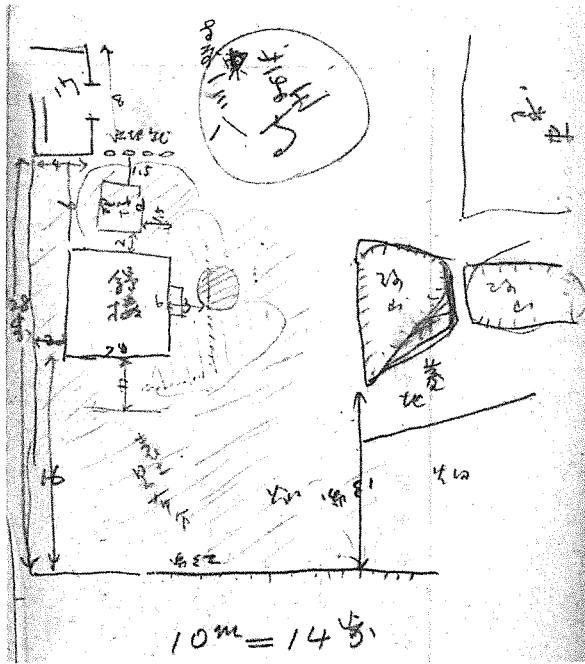


図3 1947年の薬王寺鐘楼周辺の状況
赤星資料「横浜市276」より
(神奈川県教育委員会所蔵)

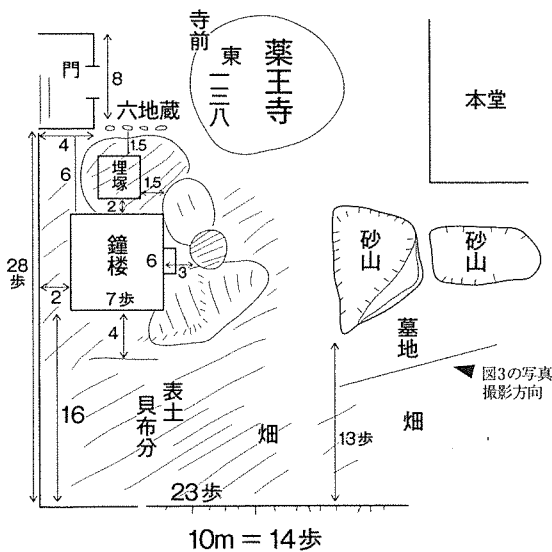
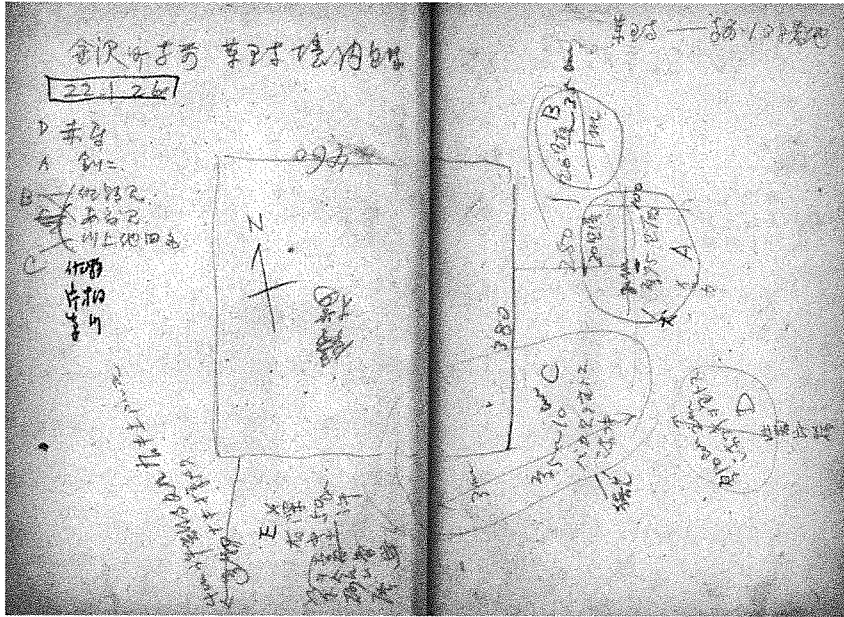


図2 薬王寺境内と貝塚配置
赤星野帳 p.1 より (神奈川県教育委員会所蔵)
下は書き起こし (文字の向きは統一)

A 地点は「砂丘上の径約二米の播鉢形のくぼみに構成せられた貝塚」(赤星草稿)である。A 地点では断面図が2面作成されている(図5、6)。2面の描き分けは不明だが、いずれも図の右側にはB地点が含まれ、図6には左側にC地点も示されていることから、A地点の南北断面を東側から観察したものと考えられる。図4でA地点に示された南北方向の線が概ね断面図の位置に該当するものと推測する。図5ではA地点の北半のみが描かれる。

地表から20cm程が砂質の表土となる。図5のA・B地点間を見ると、表土直下に砂層が確認されている。草稿では「遺物を全く認めない」「海岸砂層」とされており、地山と判断できる。上記のように、A地点は砂層中の「くぼみ」に堆積した混土貝層からなる。「くぼみ」は最深部で混土貝層上面から60~75cm程である。人工遺物は、混土貝層中の上方40cm程にはほとんど含まれず、下方20cm程の範囲から出土する。縄文土器が多く、凹石、イルカ、イヌ等の骨の出土が記録されている。貝ではバカガイ、シオフキが目立つようだ。



金沢町寺前 薬王寺境内貝塚

22. 1. 26

- D 赤星
- A 剣二
- B 佐野君
安藤君
川上他四名
- C 佐野
片桐
草川

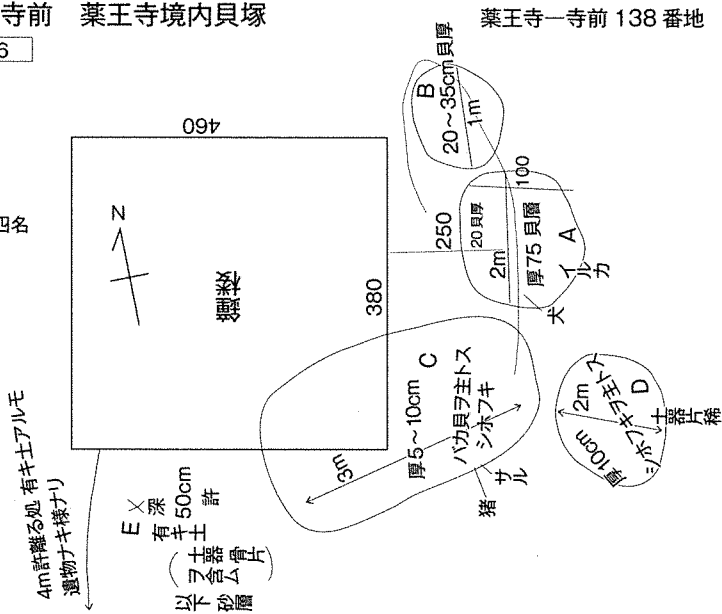


図4 薬王寺鐘楼周辺の貝塚分布状況
赤星野帳 pp.4-5 より (神奈川県教育委員会所蔵)、下は書き起こし

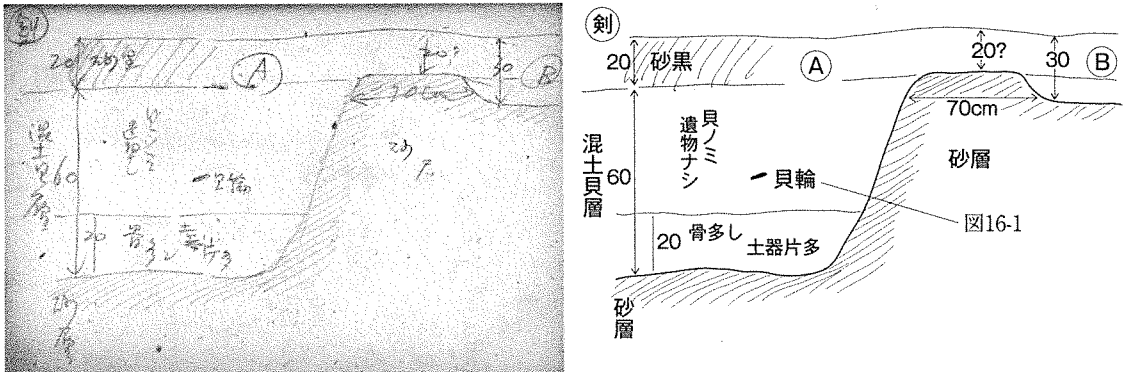


図5 薬王寺貝塚 A 地点土層断面図 (1)
赤星野帳 p.3 より (神奈川県教育委員会蔵)、右は書き起こし

アカニシ製の貝輪 (図 16-1) が混土貝層の中ほどから検出されている。また、図 6 に示された底面上の中央からやや南寄りの位置の焼骨や焼貝殻を含む灰層の存在は注意される。なお、A 地点は赤星の次男である赤星剣二が担当した。

この「くぼみ」の性格が気になるころだが、赤星が「砂中ノ落コミ部ハ堅穴アトカ」と記すように堅穴住居址の可能性が考えられる。床面の硬化や貼床のような痕跡は記録されていないが、自然砂層を床面とする住居址は称名寺 D 貝塚第 3 地点でも検出されている (J3 号、J4 号住居址) (株式会社斉藤建設編 2019)。また、炉跡こそ検出されていないが灰層の存在はそれを強く示唆しよう。以上のことから、ここでは本「くぼみ」は住居址である可能性が高いと考えておきたい。

残念ながら、土器の出土地点情報が記録されていないため、本「くぼみ」の時期の絞り込みは困難である。ただ、次章で見るように本調査での出土土器は縄文時代後期前葉のものがその大多数を占める。また本調査で出土した土器の大部分が A 地点からの出土である (赤星草稿) ことから考えると、本「くぼみ」も当該期の所産としてまず問題ないだろう。また、灰層出土の可能性のある白色付着物を伴う土器片も堀之内 1 式のものであり蓋然性がある (図 13)。

B 地点では「径約一米深約三十糎の浅いくぼみ」の中に「貝殻片を僅に混ざる程度の有機土層があり、土器片及骨片を僅に混じてみた」(赤星草稿)。土層断面図 (図 7) では方角が示されていないが、図 4 の B 地点に引かれた南北方向の線に概ね該当するものと推測する。

17cm の砂質の表土下の「くぼみ」に貝 (シオフキの細片) を含む砂土層が堆積している。「くぼみ」の最深部は砂土層上面から 35cm である。砂土層には土器片がまばらに含まれる。出土土器は A 地点のものと差異はない (赤星草稿)。なお、B 地点の担当は佐野、安藤である。

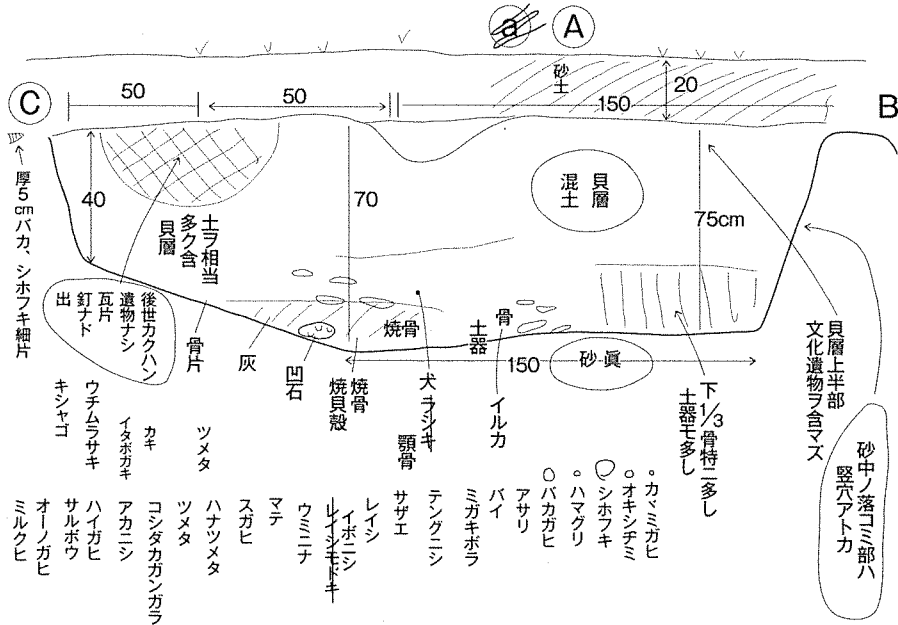
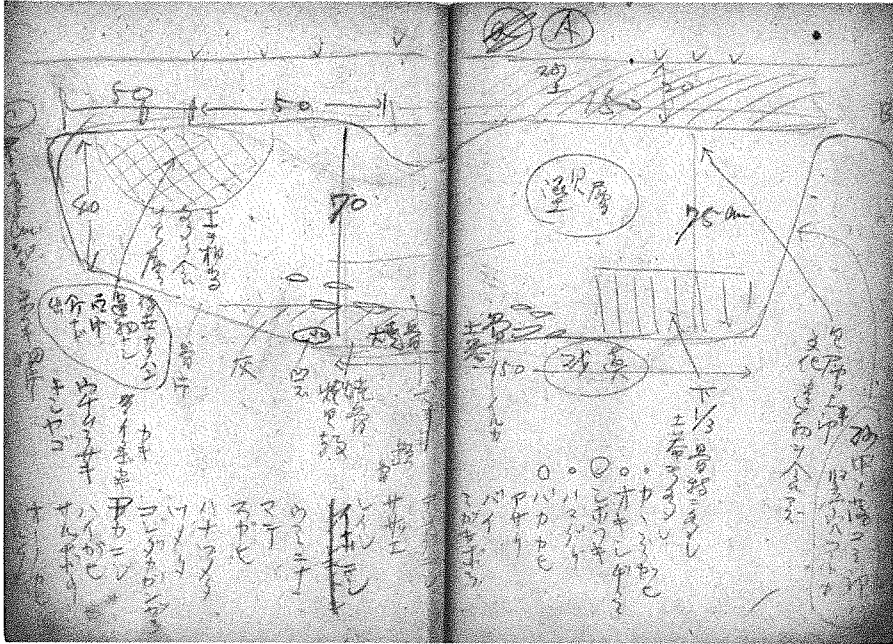


図6 葉王寺貝塚 A 地点土層断面図 (2)
 赤星野帳 pp.6-7 より (神奈川県教育委員会所蔵)、下は書き起こし

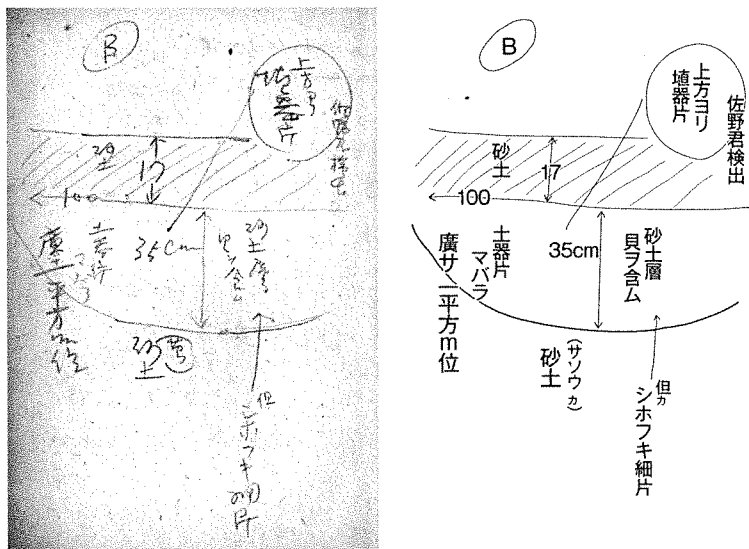


図7 薬王寺貝塚 B 地点土層断面図
赤星野帳 p.8 より (神奈川県教育委員会所蔵)、右は書き起こし

B 地点の「くぼみ」は A 地点のものより小ぶりで竪穴住居址とするには些か心もとなく、性格不明の落ち込みとしておきたい。

C 地点は、20cm 程の表土下の「バカガイを主とし、シオフキを混ざる厚五糶乃至一〇糶の純貝層に近き貝層」と、その下層の「約一〇糶乃至五糶の有機土層」からなる (赤星草稿)。貝層は無遺物で下層の「有機土層」から少量の土器片、獣魚骨が出土した。図 4 ではイノシシ、サルの検出もメモされている。土器は A 地点のものと相違ない (赤星草稿)。C 地点の北西は鐘楼と重複する。C 地点の担当者は川上、佐野、片桐、草川らである。

D 地点は、20cm 程の表土下の純貝層で「シオフキを主としバカガイを混ざる」 (赤星草稿)。層厚は 10cm 程で範囲は径 2m 程である。土器片と獣魚骨片がわずかに含まれる。D 地点は赤星が担当している。

E 地点は貝層を伴わない遺物包含層である。20cm 程の表土下に層厚 30cm 程の包含層があり、土器片、獣骨片が検出されている。E 地点の担当者は記載されていない。

また、各地点の表土等から土師器片が採集されている。

4. 出土遺物

(1) 縄文土器 (図 8~13)

本調査での主要な出土遺物は縄文土器だが、小破片が多く全体の器形が復元できるものはない。ここでは横須賀市博で「薬王寺貝塚」として保管されている縄文土器片 85 点の全点を図化し掲載した (註 10)。このうち赤星野帳に掲載されたスケッチと照合できた 19 点については、図中に赤星野帳掲載ページ番号を示した。

土器については出土地点、層位等の情報が残されていないため、型式学的な分類により整理した。

1~8 は中期後葉の土器群である。1 は加曽利 EⅡ式、2、3 は加曽利 EⅢ式で波状口縁となる。4~8 は小破片だが加曽利 EⅢ式であろう。6、7 は隆線区画、8 は沈線区画となる。

9~22 は後期初頭の土器群である。9~16 は称名寺式中段階、17~22 は称名寺式新段階。9、10 は波状口縁の波頂部で、9 には鎖状隆帯が垂下する。10 は環状突起を欠損したもの。12、13 は口縁に付される突起。11、14、16 は帯縄文による文様をもつ。15 は沈線間に櫛歯による波状条線が充填される。17~21 は沈線間に列点が施されるもの。17~20 は短沈線状の列点、21 は竹管状工具の垂直刺突による列点となる。22 は剣先状文の一部。沈線間の列点は確認できない。堀之内 1 式に下る可能性もあろう。

23~49 は後期前葉の土器群である。23、24 は口縁下の水平区画沈線以下に縦位、斜位の沈線が描かれるもの。25、26、28 は頸部破片で、26 の括れ部には「8」状の貼付文が付される。39~47 は三本一組の沈線により文様が描かれるもの。46、47 は注口土器か。48、49 は沈線文様をもつ底部破片。いずれも堀之内 1 式。

50~84 は後期初頭から前葉にかけての土器群である。50~52、54~62 は櫛歯条線が施文されるもので、格子状となるもの (55~57)、蛇行垂下するもの (61、62) がある。58 は単沈線による可能性もある。53、63~65 は沈線による蛇行垂下文が描かれるもの。53 は 2 本一組の施文具をコンパス状に半回転させながら描いている。61 も同様の技法であろう。63 は一本ずつの施文。64 はおそらく二本一組の施文。66~70 は縄文のみの破片。71~84 は無文で、71~76 は口縁部、77~84 は底部破片。底部破片には網代痕をもつもの (註 11) (79・80)、やや上げ底気味になるもの (83) などがある。50~84 の土器群は概ね堀之内 1 式の所産と考えられるが、称名寺式中段階以降でも伴うこともある。

85 は晩期前半の土器で安行 3a 式の口縁部破片。

土器片の一部に白色付着物が認められるものが散見された (図 13)。貝層中から出土する土器には貝殻の石灰分が溶け出すことによってこのような付着物が認めら

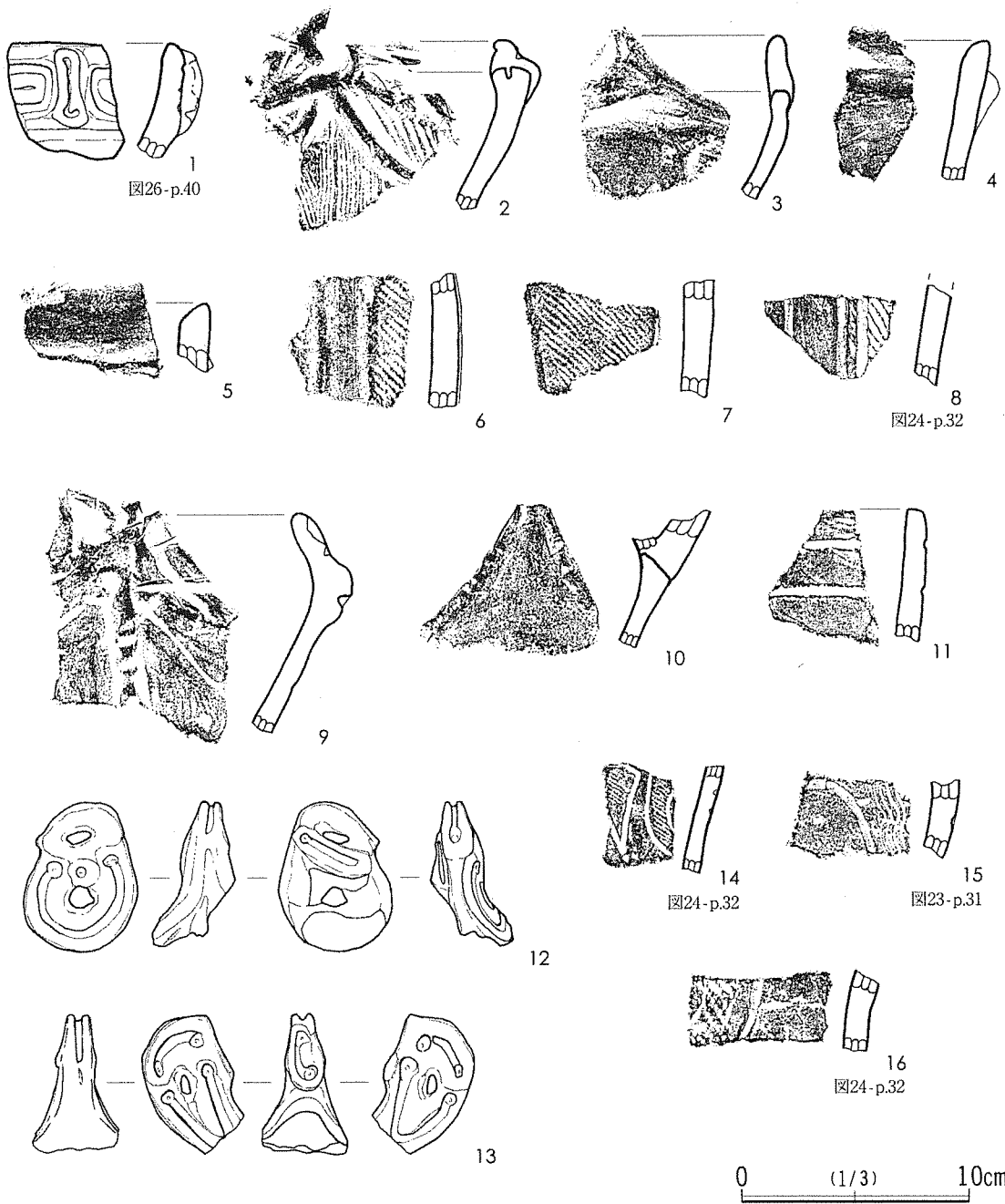


图 8 薬王寺貝塚出土土器 (1)

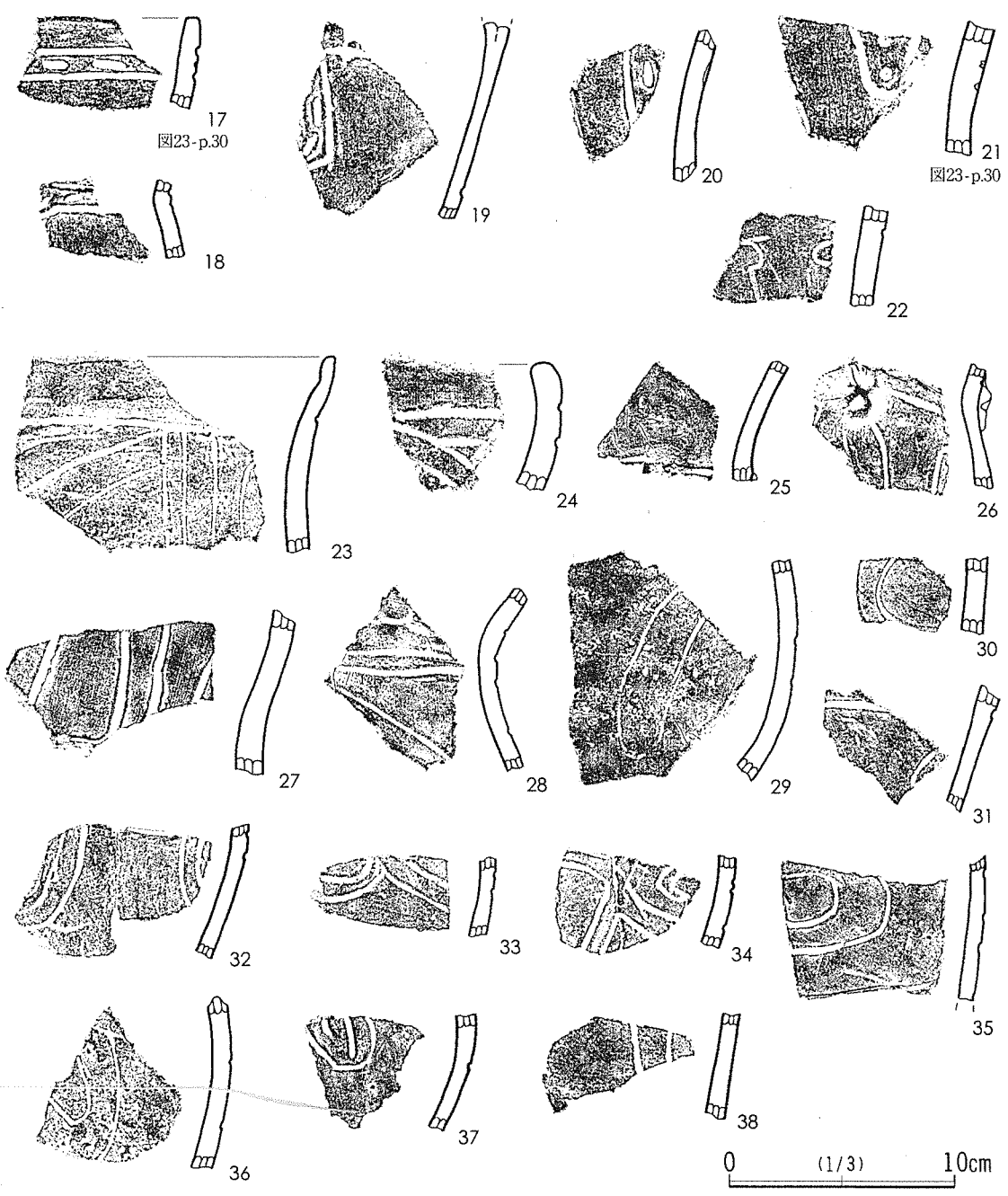


图9 葉王寺貝塚出土土器 (2)

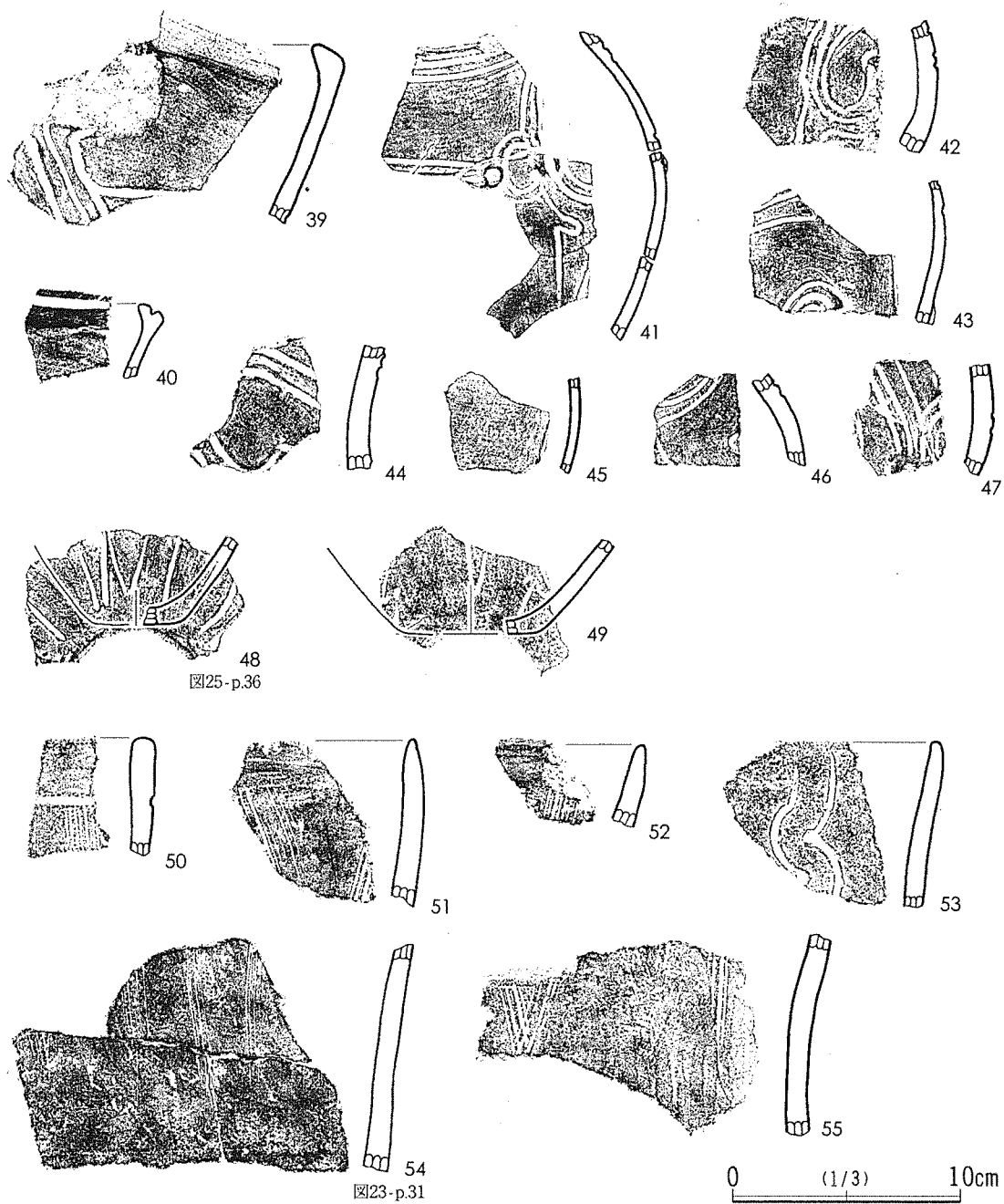


图 10 薬王寺貝塚出土土器 (3)

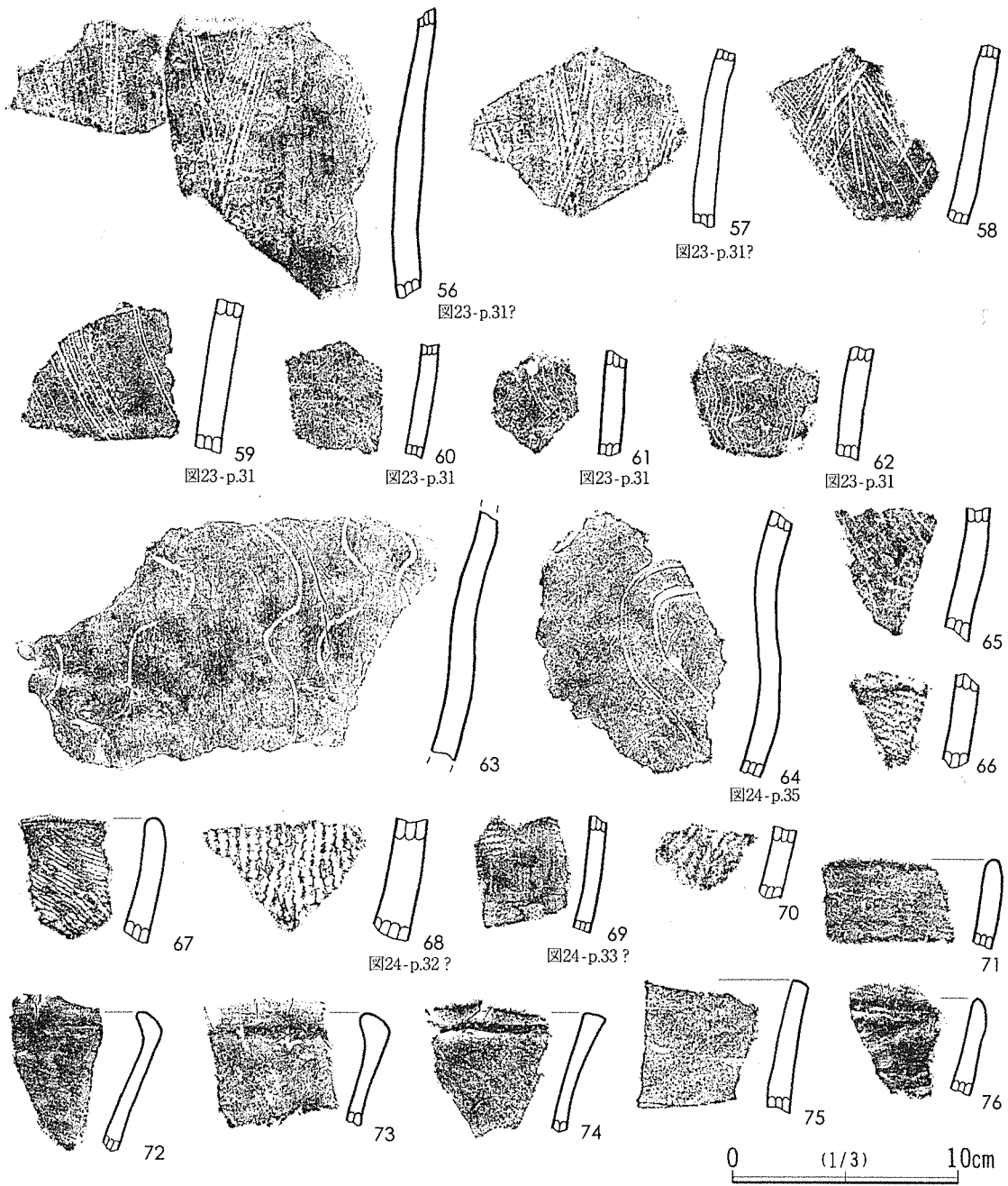


图 11 薬王寺貝塚出土土器 (4)

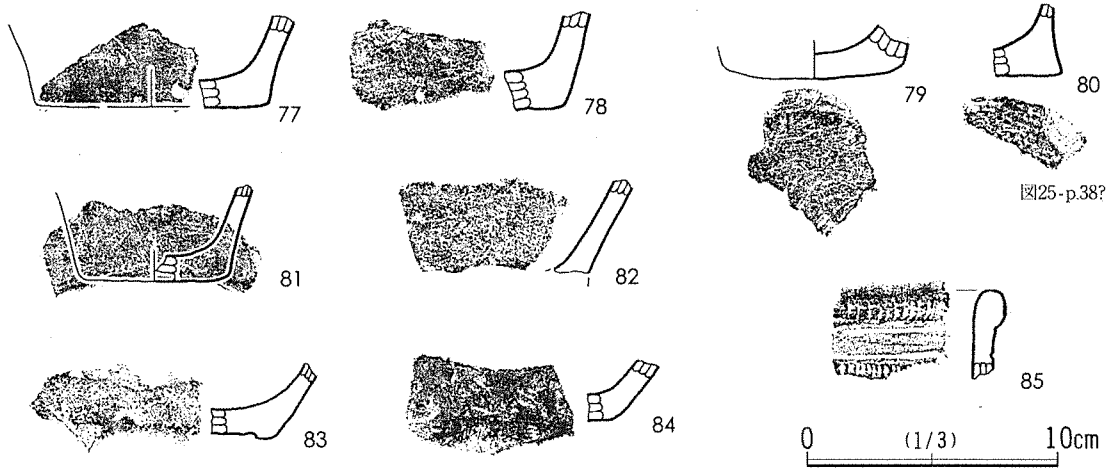


図 12 葉王寺貝塚出土土器 (5)

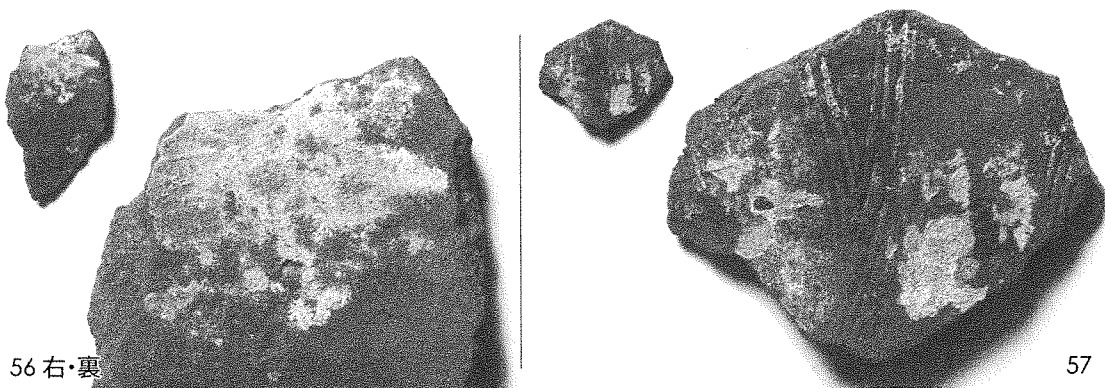


図 13 土器に見られる白色付着物

れることがあるが、これらはむしろ灰のようなものが固着しているようにも見える。A 地点では混土貝層下層に灰が認められており (図 6)、これらの土器片はその層中から検出されたものである可能性がある (註 12)。

なお、赤星野帳には称名寺式中段階から堀之内 1 式の器形復元が可能な資料や比較的大きな破片のスケッチが掲載されているが (図 23-p.30、図 24-p.34 など)、確認できなかった。

(2) 土製品 (図 14)

土器片錘が 2 点確認できた。いずれも赤星野帳にスケッチがあるが、出土地点は記載されていない (図 23-p.16、図 26-p.40)。1 は沈線のみ土器片を転用したも

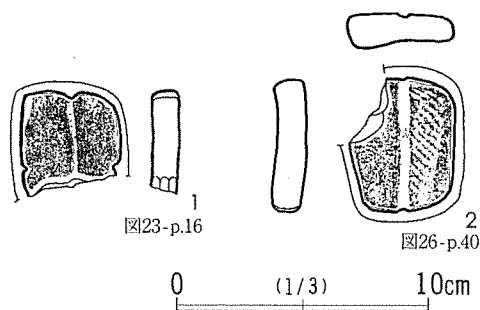


図 14 薬王寺貝塚出土土製品

ので四辺のうち一边を欠く。残る三辺には切れ込みがあり、おそらく欠損する辺にも切れ込みが入っていたものと考えられる。2 は磨消縄文を持つ。図上の左辺側が肥厚しており口縁部直下と思われる。切り込みは長軸上に認められる。文様要素に乏しいが、1 は称名寺式後半から堀之内 1 式、2 は称名寺式の土器片を転用したものと考えられる。

(3) 石器 (図 15)

薬王寺貝塚とされる石器は 5 点が確認できた。このうち打製石斧 2 点 (図 15-1、2) は赤星野帳にスケッチがある (図 26-p.41・43)。磨石 (図 15-4) は、赤星資料館ノートに昭和 14 年 8 月付けで「稱名寺門前薬王寺鐘楼ワキ貝塚 (貝少量・堀ノ内式)」の記載とスケッチがあり (図 27)、本資料が 1947 年の発掘調査以前の採集品であることが分かる。また、赤星草稿では「C 地点採集の磨石」として「上下面を稍扁平にした角をとった三角形に近いもので殆どにぎりめしを見る様な形で極めて念入に磨り上げられた美しいもの」との記載があり、指摘された特徴の類似から本資料を指していると考えられよう。赤星野帳の A 地点貝層断面図には凹石の存在が記されているが (図 6)、現物は確認できなかった。

なお、赤星草稿には「打石斧二個と凹石一個あるに過ぎない」と記されていることから、磨製石斧片 (図 15-3)、石棒片 (図 15-5) は赤星 1947 年調査に伴う資料ではなさそうである。現状ではこの 2 点の来歴は不明だが、横須賀市博において赤星旧蔵の同貝塚出土品とされているため掲載した。

1、2 は打製石斧である。1 の平面形は分銅形である。表裏両面に自然面が観察されるため、板状の礫を素材とすることが分かる。両側縁には連続して加工が施され、くびれが作出されている。上下両端にも二次加工が施され、弧状の刃部が作出され

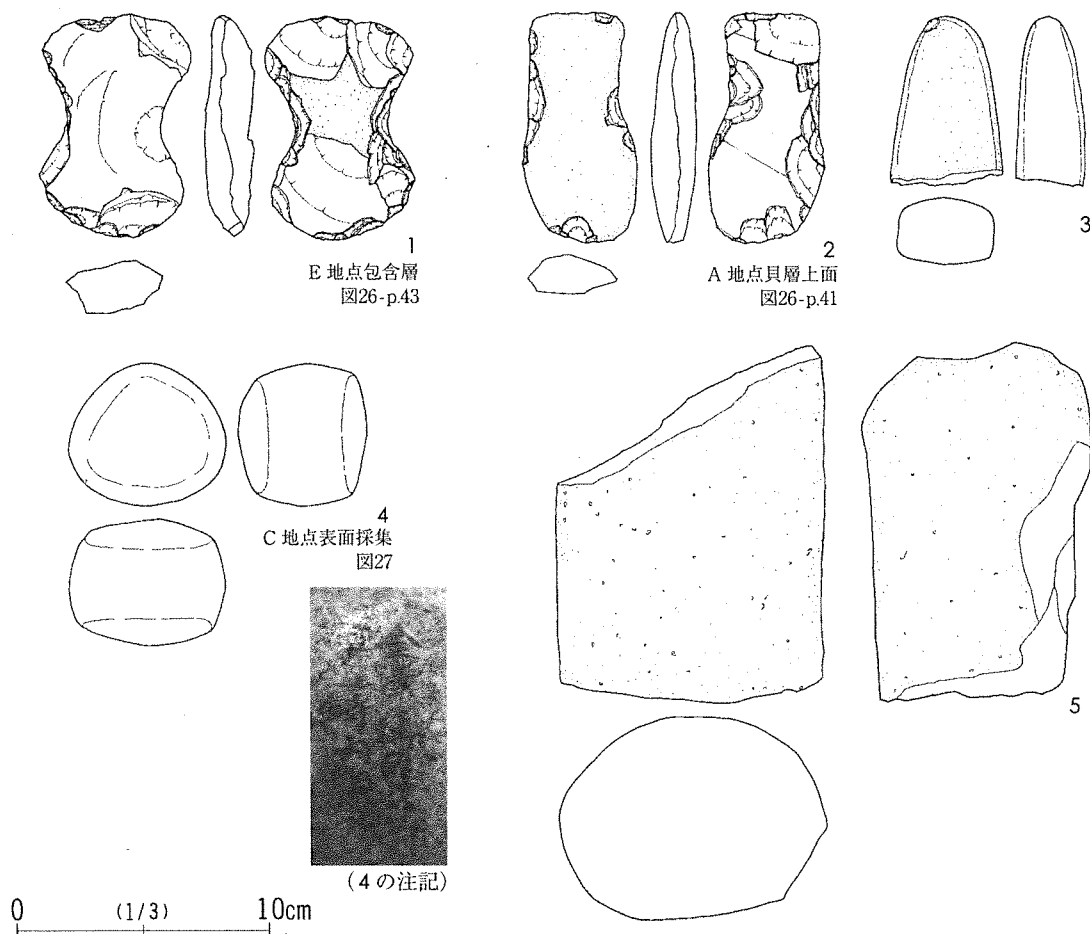


図15 薬王寺貝塚出土石器

ている。赤星野帳にスケッチおよび「粘板岩製」との記載がある（註13）。2の平面形は短冊状に近いが、下半が歪んでおり、赤星は「靴べら形」としている。背面には自然面が大きく残る。刃部は下端部両面に調整剥離が観察できるが顕著ではなく、作出途中の未成品と推測される。腹面には主剥離面が大きく残り、大形の剥片を素材としていることが分かる（註14）。出土地点について、1はE地点包含層、2はA地点貝層上面と記載されている。また赤星野帳には、1、2とも「土搔としての用途にあったもの」と記されている。

3は磨製石斧の基部であるが、全体の形状は不明である。基端部にはわずかな剥離を観察できる。断面の稜の存在から定角式磨製石斧と考えられる。

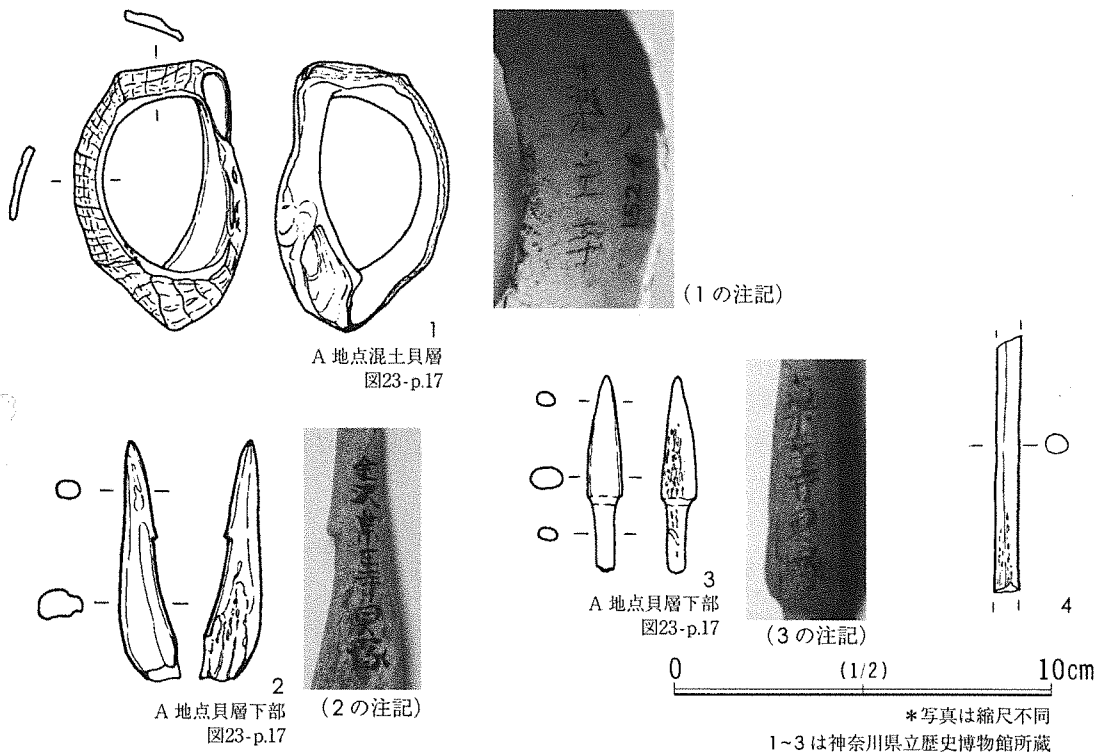


図 16 薬王寺貝塚出土骨角貝製品

4 は磨石である。平面形は略円形で全体として球状を呈する。全体が磨かれ光沢を伴う。前述のように、本資料は 1939 年 8 月に C 地点にて表採されたものと考えられる。「金澤稱名寺前薬王寺内貝塚」との墨書注記がある（註 15）。

5 は石棒である。棒状の素材に対して磨きが施され、断面は楕円状を呈している。上下両端部が折損しているため全体像は把握できない。文様等も観察できない。多孔質の石材を用いている（註 16）。

(4) 骨角貝製品（図 16）

貝輪 1 点、骨角器 3 点が確認できた。このうち貝輪と骨角器 2 点については赤星野帳にスケッチがある。赤星草稿では「銛」（本稿ではヤスとした）2 点、「骨鏃」と「骨錘」がそれぞれ 1 点と記され、それらのスケッチも確認できるが、「骨錘」（図 23-p.16）は確認できなかった。

1 はアカニシ製の貝輪である。赤星草稿に A 地点貝層中からの出土と記載され、当該地点の断面図にも出土位置が示されている（図 5）。貝輪としては小ぶりの個体を使用されている。輪の内径は長軸 45mm、短軸 27mm で女性であっても手首、腕

への装着は困難だろう。紐を通し垂飾としたか、あるいは子供用か。人為物ではない可能性も考慮したが、縁の磨きが他の個所の摩耗度とは異なることから貝輪と追認した。鉛筆による「薬王寺」の注記がある。2は鹿角製のヤスで、角度の浅い逆鉤が片側一か所に作出される。下端欠損。「金沢 薬王寺貝塚」の墨書注記がある。3は鹿角製の鋏。「薬王寺貝塚」の墨書注記がある。2、3は「A地点貝層下部」出土である（赤星草稿）。4は棒状加工品。両端を欠損する。素材はイルカと思われる。本資料は赤星野帳等には記載がなく、また動物遺体が保管されている木箱から確認されたもので、赤星は加工品とは見なしていなかったものと思われる。

現在、1～3は神奈川県立歴史博物館に所蔵されている（註17）。なお、横須賀市博に保管されている他の薬王寺貝塚資料には注記を持つものが認められない。県立博物館へ寄贈する際に薬王寺貝塚出土品の一括保管状態から持ち出されるため注記を施したと推測できるかもしれない。

(5) 動物遺体（表1、2、図17～20）

貝類と脊椎動物骨が木製整理箱1箱分保管されている。赤星の記録によれば、脊椎動物骨の同定は早稲田大学（当時）の直良信夫博士に教示を受けたようである。今回の整理では、軟体動物門腹足綱8種・二枚貝綱10種、脊椎動物門軟骨魚綱1種・硬骨魚綱2種・鳥綱1種・哺乳綱5種が確認された（表1、2）。

赤星は貝類の概要について「貝類の量は極めて少ないものであるが（中略）本貝塚を構成する主な貝はバカ貝及びシホフキで、ハマグリやカキは其の量も乏しく、且極めて小さいものである」としたうえで、「二枚貝13種、巻貝13種計26種」が検出され、「○シホフキ・○バカガヒ・カガミガヒ・オキシヂミ・ハマグリ・アサリ・マテガヒ・ハイガヒ・サルボウ・オーノガイ・ミルクヒ・カキ・ウチムラサキ・バイ・ミガキボラ・テングニシ・サザエ・レイシ・イボニシ・ウミニナ・スガヒ・ツメタガヒ・ハナツメタガヒ・コシダカガンガラ・アカニシ・キシヤゴ」が含まれると記している（赤星草稿、図6）。

脊椎動物については「獣魚骨中イルカの骨が大部分を占めることは如何に此の地の住民がイルカ獲りの名人であったかを語るもので顎骨片から考えてこの狭い遺跡に数頭の遺骨があったことは明かである」とし、検出された獣魚骨は「イルカ（顎骨・脊椎骨・歯）・イヌ（下顎骨・脊椎骨）（小型犬）・イノシシ（顎片・歯）・シカ（歯・角）・タヌキ（肢骨）・クジラ（脊椎骨）・サメ（脊椎骨）・タイ（頭骨・顎骨）・マグロ（脊椎）・鳥骨（肢骨）」と記している。

今回の再整理で確認した動物遺体と赤星の記録を照合すると、脊椎動物についてはイノシシのように一部確認できないものがあるが、基本的には一致する。

貝類では、赤星は本貝塚の主な貝としてバカガイを記しているが確認できなかった。

た。ただ、2017年に実施された称名寺D貝塚第3地点の発掘調査において、バカガイはそのほとんどが破碎されていたことを考えると（釧持 2019）、赤星はバカガイを記録したものの採集しなかった可能性もある。バカガイと同様に殻が薄く壊れやすいマテガイも、赤星の記録にはあるが確認できなかった。

バカガイは称名寺D貝塚第3地点では、貝層を形成する称名寺式期、加曾利B1式期、加曾利B3式期で出土しているが少ない。しかし、何層かある称名寺式期の貝層によっては、構成する貝全体の12%をバカガイが占めるような貝層もある。現在の平潟湾では、毎年春の大潮の時期にアサリが多く採られているが、数年に1回程の割合でバカガイが多くみられる年がある。薬王寺貝塚のバカガイを主とする貝層はこのように時に形成されたものと思われる。

出土した貝類の棲息環境をみると、主たる貝のバカガイやシオフキのように、潮間帯・潮間帯～潮下帯の砂・砂泥および泥底に棲息する貝が多い。しかし、コシダカガンガラやスガイのように岩礁や岩礫底に棲息する貝も出土していることから、当時の人々は薬王寺貝塚の前面に広がる平潟湾の砂・砂泥・泥底の海で採貝活動を行うだけでなく、野島や小柴の岩礁地帯まで行って採貝活動を行っていたことがうかがえる。

確認できた貝類のなかには、サルボウのように貝殻の表面が腐蝕しているものがある。これらの貝は死貝であるため、当時の人々が生貝と共に誤って採集してきたか、または貝塚が存在する砂丘上に元々あったものが紛れ込んだものと思われる。

魚類は種類、量共に少ない。これは薬王寺貝塚の規模の小ささや、肉眼で確認された骨のみを採集するという調査方法によるものと考えられるが、それにしても少ないように思える。このような中でカジキの尾椎骨が大きく目立つ。カジキは三浦半島の縄文時代の貝塚では、中期加曾利E式期の吉井貝塚で出土しているのみである。薬王寺貝塚のカジキの尾椎骨は大きく、筆者（釧持）所蔵のバシヨウカジキ（体重27kg）の後ろから2番目の尾椎骨（全長42.2mm、縦径18.0mm）と比べてもかなり大きい。東京湾内に入り込んだ大きなカジキをイルカと同様に称名寺式期に発達した骨角器を使って獲っていたことも考えられる。

哺乳類では周辺の称名寺貝塚群と同様なものが出土した。赤星の記録にあるようにイルカが多い。堀之内式期になってもイルカ猟に重きが置かれていたことがうかがえる。

(6) 縄文時代以降の遺物（図21）

薬王寺貝塚からは縄文時代以降の遺物も主に表土から採集されている。1は古墳時代前期の小型壺。2は古式土師器か。3～11は平安時代の土師器甕。12は須恵器長頸壺の頸部。13～16は中世のかわらけであろう。

表 1 葉王寺貝塚出土動物遺体種名・観察表 (1) 貝類

種名	棲息域	図 17 番号	出土点数	サイズ (mm) ±: 推定値	備考
腹足綱	Class Gastropoda				
古腹足目	Order Vetigastropoda				
クボガイ科	Family Tegulidae				
コシダカガンガラ	<i>Omphalius rusticus</i>	潮間帯の岩礁	5	2	殻径 25.3、24.9
リュウテンサザエ科	Family Turbinidae				
サザエ	<i>Turbo sazae</i>	潮下帯の岩礁	9、14	殻 2、蓋 1	蓋: 長径 45.0×短径 41.3 殻はいずれも体層を欠損
スガイ	<i>Lunella coreensis</i>	潮間帯の岩礫底	4	2	殻径 27.6、26.4 スガイとしては大きい
吸腔目	Order Sorbeoconcha				
ウミナ科	Family Batillariidae				
ウミナ	<i>Batillaria multiformis</i>	潮間帯の砂泥底	6	1	殻高 27.5
タマガイ科	Family Naticidae				
ツメタガイ	<i>Neverita didyma didyma</i>	潮間帯の砂泥底	15、18		大型: 最大径 81.9 中型: 最大径 69.0 臍孔が開いているものと閉じかけているものあり。大きなものは体層から次体層にかけて孔が開けられている。
アケキガイ科	Family Muricidae				
レイシ	<i>Reishia bronni</i>	潮間帯の岩礁	11	2	殻高 62.7、57.7
エゾバイ科	Family Buccinidae				
ミガキボラ	<i>Kelletia lischkei</i>	潮間帯～潮下帯の岩礁	10	2	殻高 91.8、85 ± 表面一部腐蝕
バイ科	Family Babyloniidae				
バイ	<i>Babylonia japonica</i>	潮下帯の砂底	3	2	殻高 56.7、53.6
二枚貝綱	Class Bivalvia				
フネガイ目	Order Arcoida				
フネガイ科	Family Arcidae				
サルボウ	<i>Anadara kagoshimensis</i>	潮下帯の砂泥底	12	2 (右 1、左 1)	右: 殻長 41.9 左: 殻長 49.1 右殻は表面腐蝕
ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i>	潮間帯～潮下帯の泥底	7	1 (左)	殻長 37.5
カキ目	Order Ostreoida				
イタボガキ科	Family Ostreidae				
イタボガキ	<i>Ostrea denselamellosa</i>	潮下帯の岩礁	16	1 (左)	殻高 101.6
マルスタレガイ目	Order Veneroida				
マルスタレガイ科	Family Veneridae				
アサリ	<i>Venerupis philippinarum</i>	潮間帯の砂泥底	1	1	殻長 36.5
カガミガイ	<i>Phascolosoma (Phascolosoma) noduliferum</i>	潮間帯～潮下帯の砂泥底	13	1 (左)	殻長 58.6
オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>	潮間帯の砂泥底	8	2 (右)	殻長 36.4、27.1
ウチムラサキガイ	<i>Saxidomus purpurata</i>	潮間帯～潮下帯の砂礫底	17	1 (右)	殻長 85 ± 表面一部腐蝕
バカガイ科	Family Mactridae				
シオフキ	<i>Mactra quadrangularis</i>	潮下帯の砂泥底	2	5 (右)	大型: 殻長 43.6 小型: 殻長 29.7 赤星によれば「バカガイと共に貝層を構成する主たる貝」
ミルクイ	<i>Tresus keanae</i>	潮下帯の泥底	20	2 (右 1、左 1)	右: 殻長 139.3 左殻は破片
オオノガイ目	Order Myoida				
オオノガイ科	Family Myidae				
オオノガイ	<i>Mya (Arenomya) arenaria oonogai</i>	潮間帯～潮下帯の砂泥底	19	1 (左)	殻長 115 ± この他にオオノガイかと思われる右殻破片 1 点あり

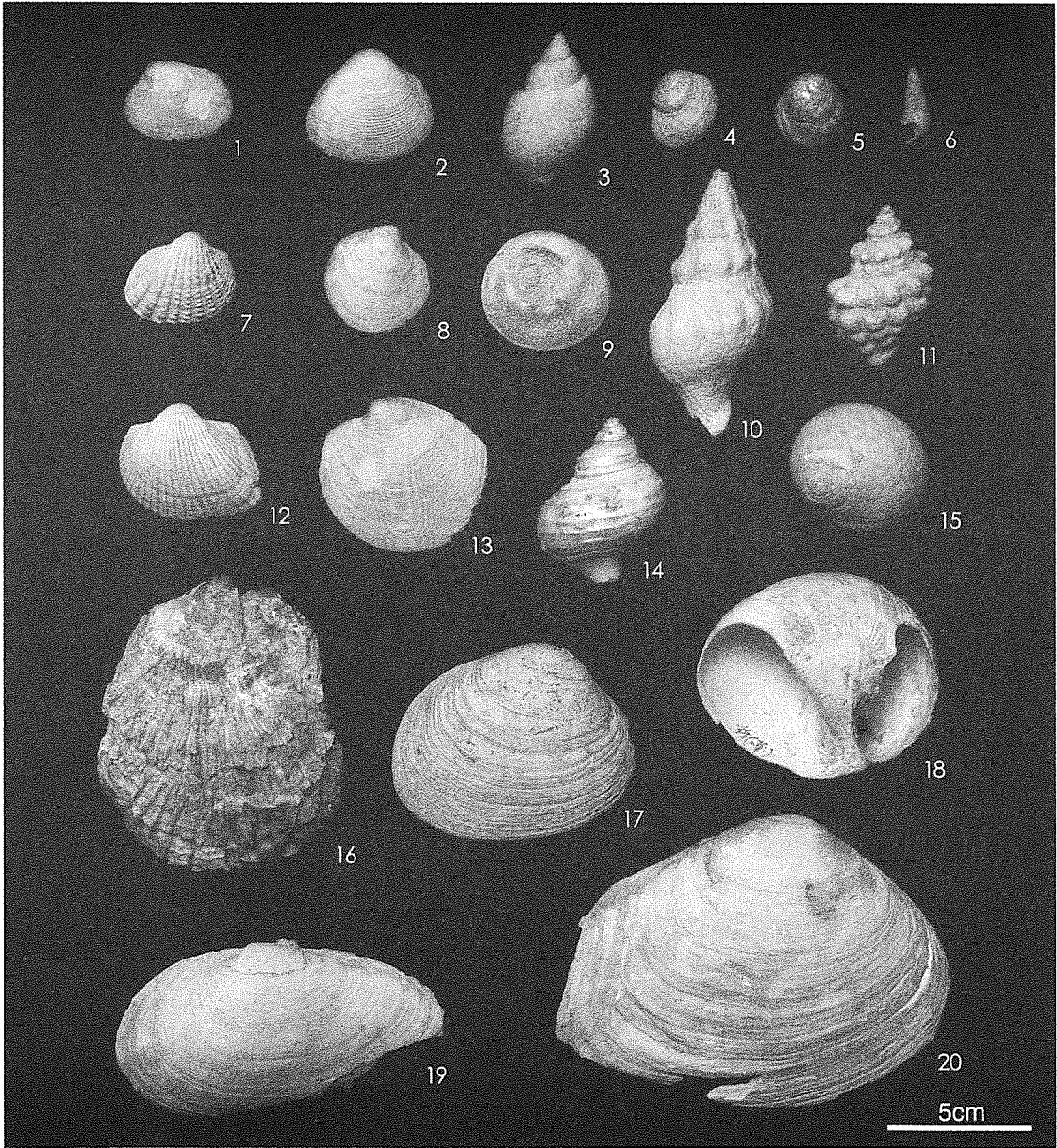


図 17 葉王寺貝塚出土動物遺体 (1)

表 2 葉王寺貝塚出土動物遺体種名・観察表 (2) 魚類・鳥類・哺乳類

種名	図 18 番号	出土点数	サイズ (mm) ±: 推定値	備考	
軟骨魚綱 メジロザメ目 メジロザメ科 メジロザメ科の一種	Class Chondrichthyes Order Carcharhiniformes Family Carcharhinidae Carcharhinidae gen. et sp.				
		脊椎骨 1	椎体長 102・椎体縦径 24.0・椎体横径 24.7		
硬骨魚綱 スズキ目 メカジキ亜目の一種	Class Osteichthyes Order Perciformes Xiphioidae sabord. et fam. indet.	2	尾椎骨 2	椎体長 75.2・椎体縦径 52.1・椎体長 61.6・椎体縦径 54.0	いずれも大型
タイ科 マダイ	Family Sparidae <i>Pagrus major</i>	1	前頭骨 1		
鳥綱 科・属不明	Class Aves Fam. et gen. indet.		1		小さな肢骨で両端部欠損
哺乳綱 クジラ目 クジラ目の一種	Class Mammalia Order Cetacea Cetacea sp.	8	脊椎骨椎頭 1	短径 80 ±	この他に骨片 1 点あり。
マイルカ科 マイルカ マイルカ科の一種	Family Delphinidae <i>Delphinus delphis</i> Delphinidae gen. et sp. indet.	9 10	左上顎骨 1 頭骨片 1 左?下顎骨片 1 環椎骨 1 腰椎骨 2 (10) 左肋骨片 2 肋骨片 3 骨片 1	腰椎骨 a: 現椎体長 25.2・椎体縦径 34.2・椎体横径 39.2 腰椎骨 b: 椎体長 40.7・椎体縦径 38.3・椎体横径 40.2	先端部欠損 頭骨片、環椎骨は海綿質部分まで焼ける。 腰椎骨 a は後骨端骨が剥れる。 左横突起に 4 × 3mm の刺突痕?あり。 この他にイルカ?の骨の棒状加工品あり (図 15-4)
ネコ目 イヌ科 タヌキ	Order Carnivora Family Canidae <i>Nyctereutes procyonoides</i>	4	右上腕骨 1	遠位端最大幅 182	近位端欠損。この他にタヌキ?の中足骨? (骨端骨剥離) が 1 点あり。
イヌ	<i>Canis familiaris</i>	5~7	左切歯骨 1 (5) [× I? P] 右下顎骨 1 (6) [×× M ₁ ××] 左下顎骨 1 (7) [× M ₁ M ₂ ×] 1 遊離歯右下 C ₁	右下顎骨 M ₁ : 歯冠長 17.8・歯冠幅 7.2・歯冠高 10.0 左下顎骨 M ₁ : 歯冠長 18.0・歯冠幅 7.0・歯冠高 10.4・M ₁ 下の下顎体幅 9.5 遊離歯右下 C: 歯冠長 8.0・歯冠幅 5.2・歯冠高 14.0	赤星の左切歯骨の図には P も描かれる (図 21-p.13)。 右下顎骨は切歯部と下顎枝を欠損、P ₁ の歯槽は閉じる。M ₁ の咬耗はごく僅か。 左下顎骨は切歯部と下顎枝を欠損、P ₁ の歯槽は閉じる。右下顎骨と同一個体と思われる。遊離歯右下 C が右下顎骨に伴うものかは不明。
ウシ目 シカ科 ニホンジカ	Order Artiodactyla Family Cervidae <i>Cervus nippon</i>	3	左中足骨遠位端 1	遠位端最大幅 33.1	遠位中足骨の位置で輪に擦切ったもの、背側の一部と滑車のごく一部に褐色の付着物が認められる、滑車の両側面に齧られた痕 (又は解体痕?) が認められる (図 19)

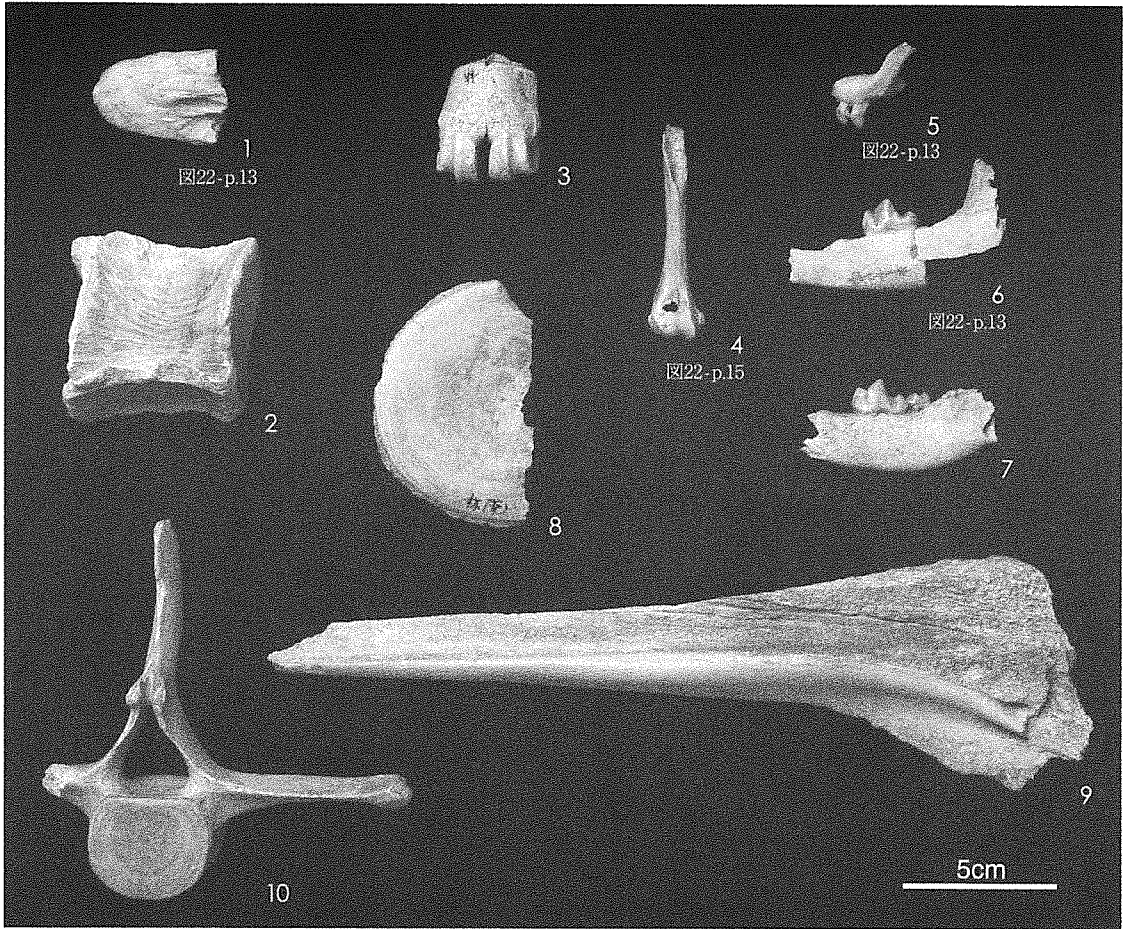


図 18 葉王寺貝塚出土動物遺体 (2)

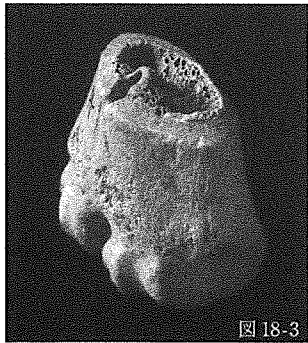


図 19 シカ中足骨の切断痕



図 20 動物遺体に見られる注記

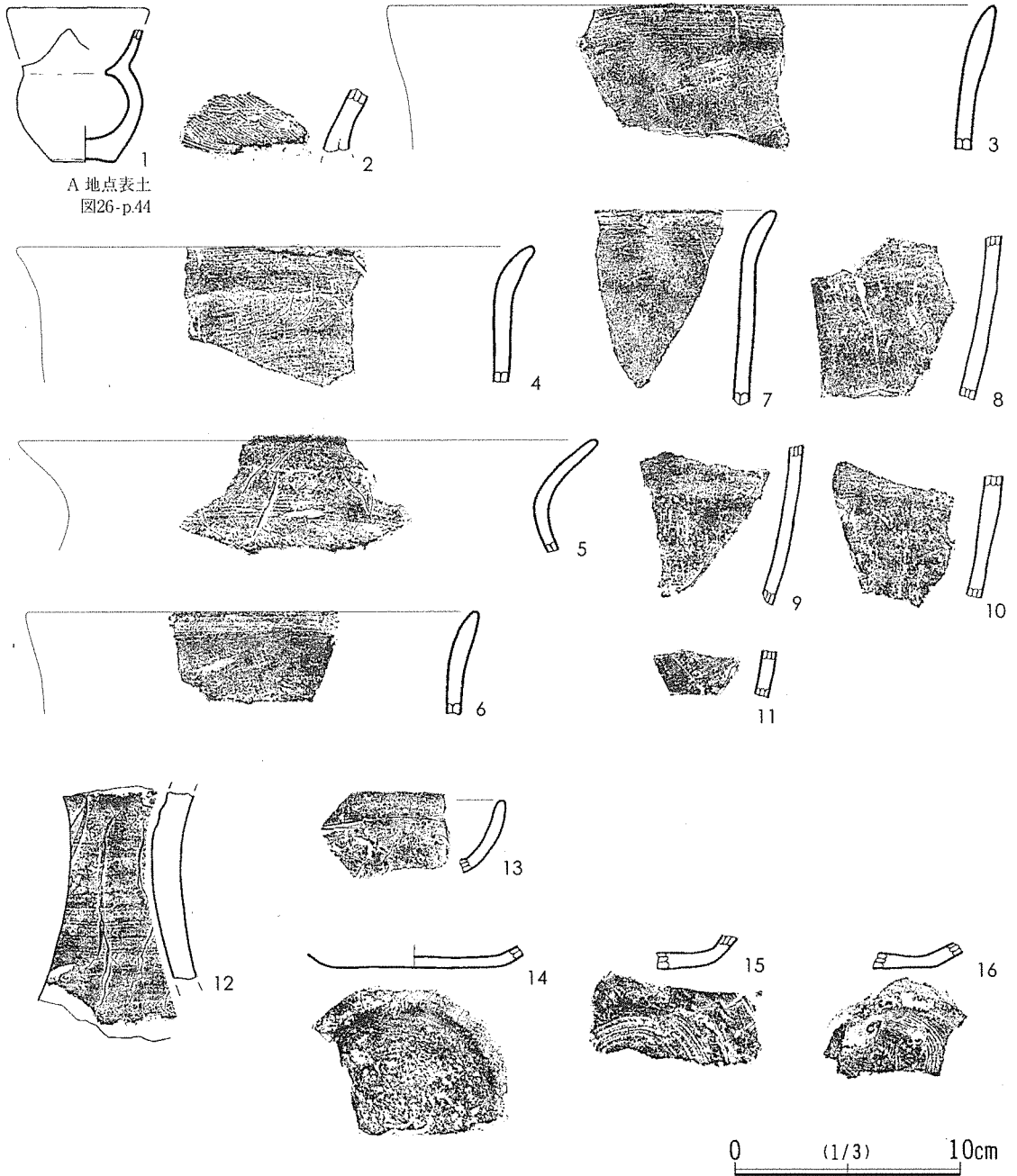


图 21 菓王寺貝塚出土遺物 縄文時代以降

まとめ

称名寺貝塚群が位置する古平潟湾沿岸には湾奥部の台地上に青ヶ台貝塚が存在しており、両遺跡の関係性が問われてきた。石井寛は両者間で遺跡規模の時期的推移が相反することを指摘し、その中で堀之内1式期は称名寺貝塚が小規模化し青ヶ台貝塚で多くの遺物が検出されることから、当該期にあつては青ヶ台貝塚が称名寺貝塚に代わり「この湾岸における中核的な集落」となっていた可能性を指摘している（石井2016）。薬王寺貝塚A地点で確認された「くぼみ」が堀之内1式期の住居址だとすれば、小規模化した称名寺貝塚群の中で数少ない居住痕跡となる。

また、称名寺式期に盛んであつたイルカ漁が堀之内1式期を境に下火となり陸獣猟へ推移することはこれまでも指摘されてきたが（金子1968、中村2016）、薬王寺貝塚にあつては赤星が「イルカの骨が大部分を占め」「如何に此の地の住民がイルカ獲りの名人であつたかを語る」と評価するように、当該期になつてもイルカ漁が継続されていることも確認しておきたい。ただ、それに関連づけられそうな道具類は本貝塚からは今のところ検出されていない点は気にかかるところでもある。

称名寺貝塚群は赤星が1925年に発見して以来、小規模な発掘調査が断続的に実施されてきたが、その間に一帯は宅地化が進み、遺跡の詳細な全体像把握が困難なまま今日に至っている。そのような中で、本稿で報告した薬王寺貝塚資料のように過去に発掘調査された資料の整理、公表は急務であろう。赤星による1949年の「稱名寺山門内貝塚」（称名寺A貝塚）調査も未整理、未報告である。

2017年には集合住宅建設に伴い称名寺D貝塚第3地点が150㎡にわたって発掘調査され多くの知見が得られているが（株式会社斉藤建設編2019）、新たな調査の成果をより幅広い解釈へとつなげていくためにも、過去の調査資料の整理も継続して行っていくことが必要である。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、金子浩昌、倉持卓司、高橋健、鹿野融雅、梅沢恵、貫井裕恵、恩田勇、難波江春風、藤山龍造、斎藤彦司の各氏にご助言、ご協力をいただきました。記して御礼申し上げます。

本稿の準備中に、横須賀市自然・人文博物館の考古担当である稲村繁さんの計報に接した。長く同館の考古分野の活動を支えられ、本稿執筆にあつても準備段階から多くのご協力をいただいた。あまりに突然で未だ実感が湧いていないというのが実際の心境である。あらためてご冥福をお祈りいたします。

註

- (1) この土器は、現在、横須賀市自然・人文博物館に収蔵されている。
- (2) 吉田が本発掘を企図したきっかけは在野研究者の林國治が当地で表面採集した土器を見たことだったが(吉田 1960)、その土器と考えられる資料を含む一連の土器群は現在神奈川県立歴史博物館に収蔵されている(千葉 2015)。
- (3) 吉田は称名寺 E 貝塚を「歴史時代の貝塚」としている。
- (4) 今日「称名寺貝塚」と呼称する場合には、A~I の各貝塚を総称した貝塚群を指すことが多い。なお、称名寺貝塚の全体については横浜市歴史博物館編(2016)でまとめられている。
- (5) 横須賀市博の赤星寄贈資料目録では横浜市薬王寺貝塚の資料として「896 土器片 110 点 縄文後期」「897 土製品(土錘) 2 点 縄文後期、古墳、奈良」「898 石器(打製石斧) 2 点 縄文」、「称名寺前貝塚」として「899 石器 1 点 縄文」が記載されている(横須賀市博物館編 1983)。
- (6) 各館へ収蔵されたのは横須賀市博が 1981 年、神奈川県立歴史博物館(当時は博物館準備事務局)が 1964 年である。
- (7) 赤星ノート市町村別目録番号「横浜市 01274」「横浜市 01276」(神奈川県立埋蔵文化財センター編 1996)。
- (8) 現在、鐘楼は境内南方へ移設されており赤星調査時とは異なっている。确实ではないが、図 3 右端に写る石塔も現在より門に近いように見える。
- (9) 赤星は薬王寺貝塚調査の前後に実施した発掘調査においてもトレンチによる調査を実施しており、1932 年に山内清男と共同で実施した横須賀市田戸遺跡の調査等が知られる(奈良国立文化財研究所編 1992)。
- (10) 横須賀市博物館の赤星寄贈資料目録では薬王寺貝塚の土器片は「110 点」となっており、25 点は確認できなかった。
- (11) 赤星は「竹アミ目」としている。
- (12) あるいは千葉県大膳野南遺跡の当該期の遺構で知られるように、漆喰状の素材も考えられる(国際文化財株式会社・玉川文化財研究所編 2014)。
- (13) 本資料には「016」のシールが貼付され「~~031~~ 016、230、横浜市金沢区六浦西青ヶ台、赤星直忠コレクション」と記されたラベルが付属するが、赤星野帳との照合により薬王寺貝塚出土資料と判断した。目録の 898 の 1 つか。
- (14) 本資料には「013」のシールが貼付され、「~~029~~ 013、251、横浜市金沢区薬王寺貝塚、No.8、赤星直忠コレクション」と記されたラベルが付属する。目録の 898 の 1 つか。

- (15) 本資料には「017」のシールが貼付され、「030 017、109、横浜市金沢称名寺前薬王寺内貝塚、赤星直忠コレクション」と記されたラベルが付属する。目録の 899 か。
- (16) 本資料には「石製品 251、横浜市金沢区薬王寺貝塚、赤星直忠コレクション」と記されたラベルが付属する。
- (17) 神奈川県立歴史博物館での資料番号は下の通り。
- 図 16-1 : CX0000422
 図 16-2 : CX0000302
 図 16-3 : CX0000303

引用文献

- 赤星直忠 1926「相模國新遺跡三個處」『考古学雑誌』第 16 卷第 3 号、考古学会
- 赤星直忠 1950『先史時代の三浦半島』三浦半島研究会
- 赤星直忠 1963「横須賀市吉井城山第一貝塚調査概報(二)」『横須賀市博物館研究報告(人文科学)』第 7 号、横須賀市博物館
- 赤星直忠 1988「称名寺(周辺を含む)遺跡と私」『史跡称名寺境内庭園苑池保存整備報告書(昭和 53~62 年度)』横浜市教育委員会
- 石井 寛 2016「称名寺貝塚の概要と問題の設定」『称名寺貝塚と称名寺式土器』横浜市歴史博物館・(公財)横浜市ふるさと歴史財団
- 石野 瑛 1933「金澤町寺前出土の縄紋土器」(石野 瑛 1973『考古集録 第一』武相叢書 1 に再録)
- 岡本 勇 1984「今までにおこなわれた調査」『称名寺 I 貝塚発掘調査報告』横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 神奈川県立埋蔵文化財センター編 1996「寄贈資料紹介「赤星ノート」市町村別目録(1)」『神奈川県立埋蔵文化財センター年報 14 平成 6 年度』神奈川県立埋蔵文化財センター
- 金子浩昌 1968「称名寺 D 貝塚出土の動物遺存体」『武蔵野』第 47 卷第 2・3 号、武蔵野文化協会
- 株式会社斉藤建設編 2019『称名寺 D 貝塚第 3 地点発掘調査報告書—横浜市金沢区金沢町 153-9、153-10—』株式会社斉藤建設埋蔵文化財調査部
- 釘持輝久 2019「称名寺 D 貝塚第 3 地点ブロックサンプリング中の軟体動物遺体と脊椎動物遺体」『称名寺 D 貝塚第 3 地点発掘調査報告書—横浜市金沢区金沢町 153-9、153-10—』株式会社斉藤建設埋蔵文化財調査部
- 国際文化財株式会社・玉川文化財研究所編 2014『大膳野南貝塚発掘調査報告書』千葉市教育委員会
- 小宮恒雄 2001「縄文漁労の盛期—称名寺貝塚」『図説かなざわの歴史』金沢区制 50 周年記念事業実行委員会
- 高橋 健 2015「称名寺貝塚の研究」『横浜市歴史博物館調査研究報告』第 11 号(公財)横浜市ふるさと歴史財団
- 高橋 健 2016「称名寺貝塚の調査」『称名寺貝塚と称名寺式土器』横浜市歴史博物館・(公財)横浜市ふるさと歴史財団

高橋 健 2019「東京湾沿岸のイルカ漁」
『考古学の地平Ⅱ—縄文時代中期の土
器論と生業研究の新視点—』六一書房

高橋 健・千葉 毅 2016「神奈川県立歴
史博物館所蔵の骨角器—林國治氏、赤星
直忠氏旧蔵の横浜市称名寺貝塚採集資
料—」『神奈川県立博物館研究報告—人
文学—』第43号、神奈川県立歴史博
物館

千葉 毅 2015「神奈川県立歴史博物館所
蔵の考古資料—林國治氏、小林小三郎氏
旧蔵の横浜市称名寺貝塚採集資料—」
『神奈川県立博物館研究報告—人文科
学—』第42号、神奈川県立歴史博物館
中村若枝 2016「称名寺貝塚におけるイル
カ猟をめぐる生業活動の変移と諸相」

『称名寺貝塚と称名寺式土器』横浜市
歴史博物館・(公財)横浜市ふるさと歴
史財団

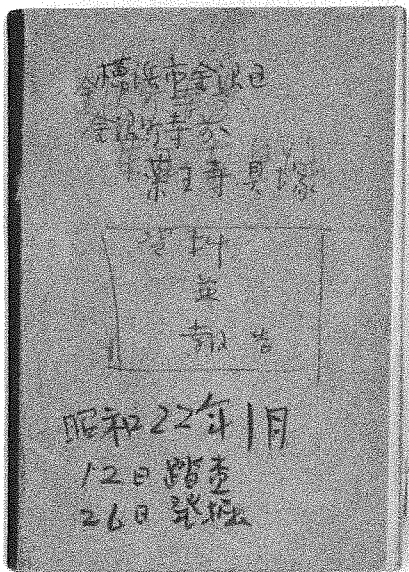
奈良国立文化財研究所編 1992『田戸遺跡
資料—山内清男考古資料 4—』奈良国立
文化財研究所史料第34冊、奈良国立文
化財研究所

横浜市歴史博物館編 2016『称名寺貝塚—
土器とイルカと縄文人—』横浜市歴史博
物館・(公財)横浜市ふるさと歴史財団

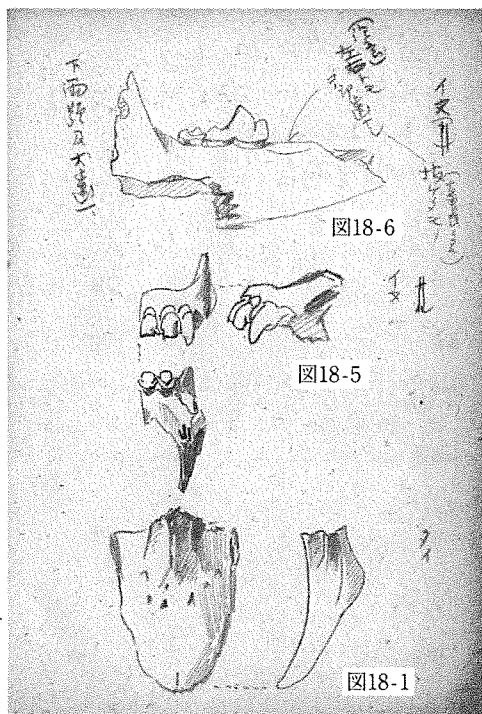
吉田 格 1960「横浜市称名寺貝塚」『東京
都武蔵野郷土館調査報告書』第1冊、
武蔵野文化協会

横須賀市博物館編 1983「赤星直忠博士寄
贈考古資料目録」『横須賀市博物館資料
集』第7号、横須賀市博物館

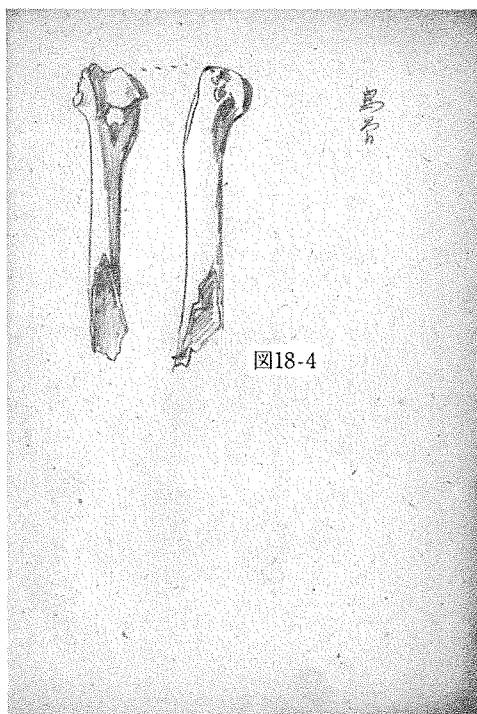
本稿は神奈川県立歴史博物館総合研究「神奈川県域における大正・昭和期の文化財
保護・地域史研究と在野研究者の関係性をめぐる研究」の成果の一部を含んでいる。



表紙

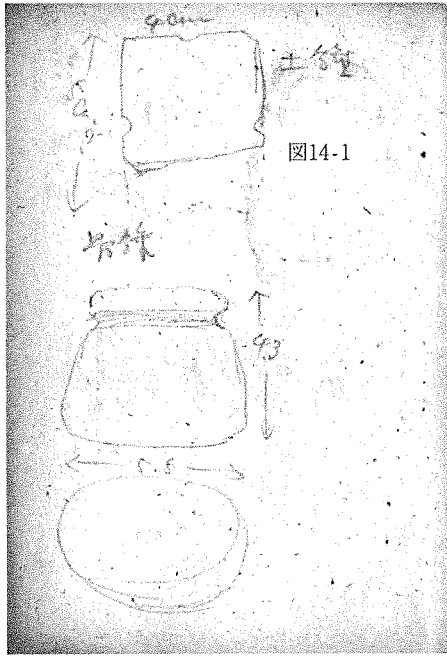


p.13

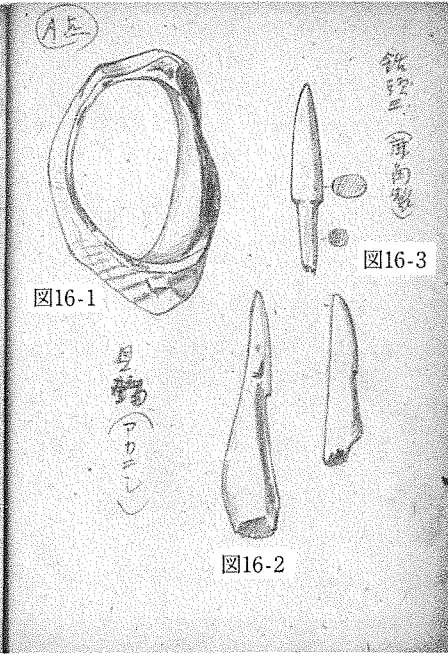


p.15

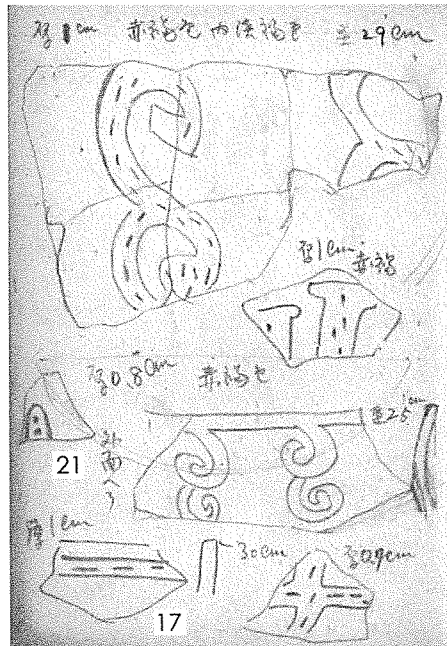
図 22 赤星直忠の薬王寺貝塚調査野帳（神奈川県教育委員会所蔵）（1）



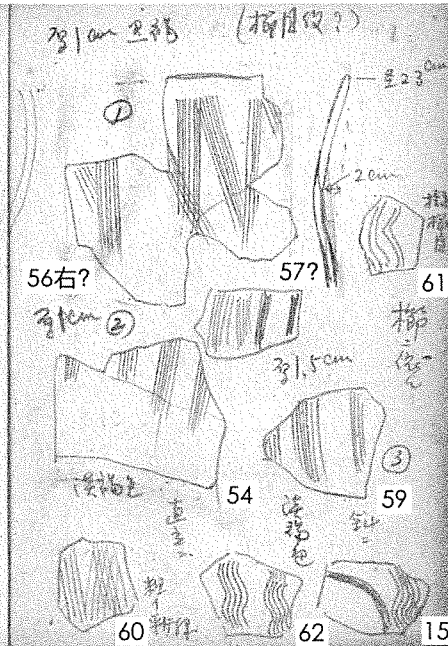
p.16



p.17

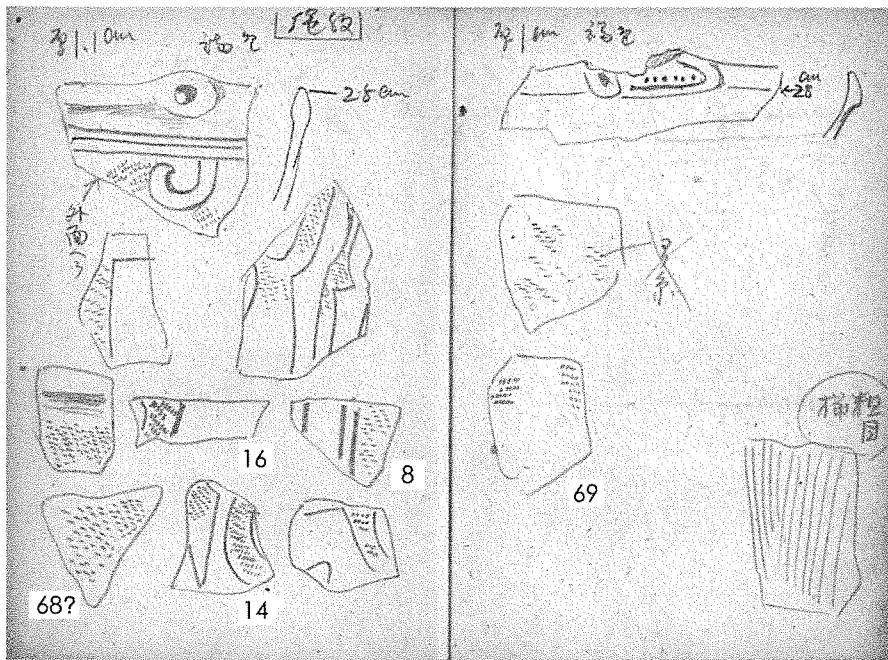


p.30



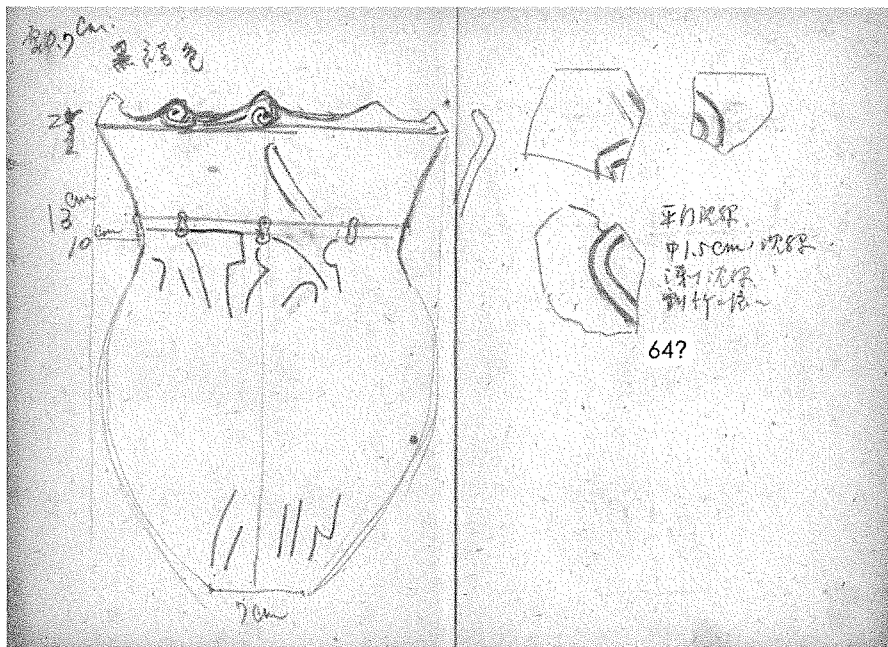
p.31

図 23 赤星直忠の薬王寺貝塚調査野帳 (神奈川県教育委員会所蔵) (2)



p.32

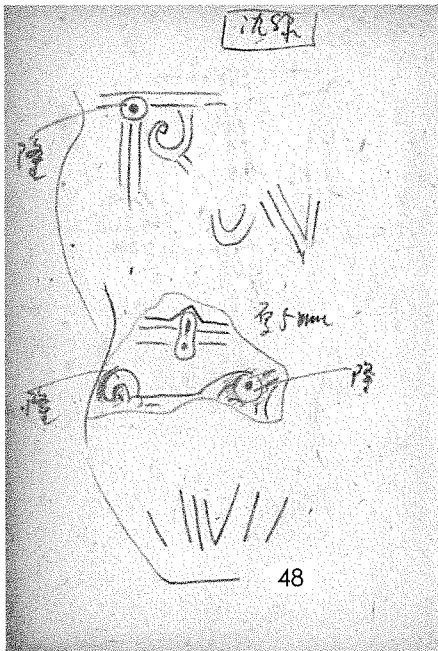
p.33



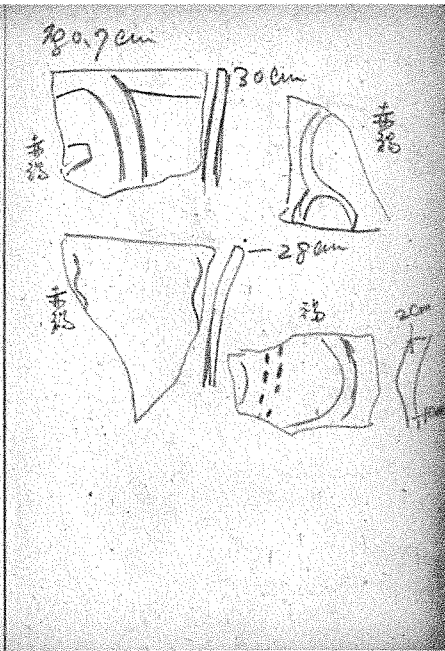
p.34

p.35

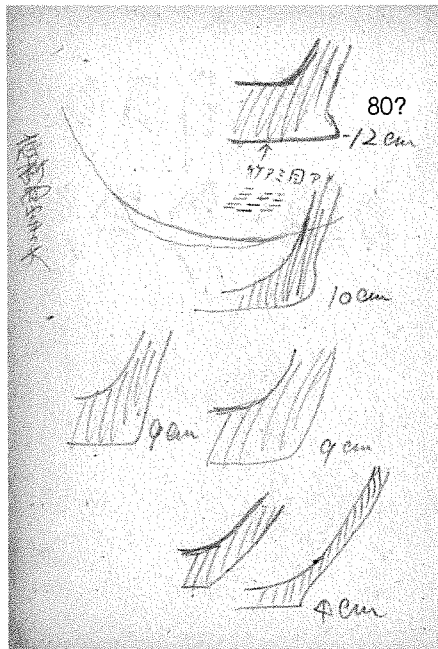
図 24 赤星直忠の薬王寺貝塚調査野帳（神奈川県教育委員会所蔵）（3）



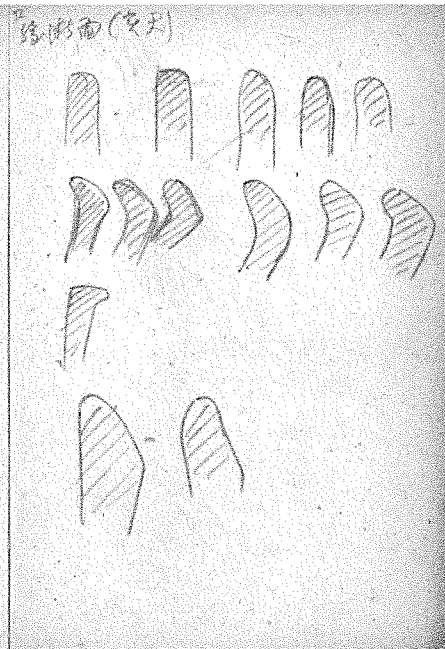
p.36



p.37

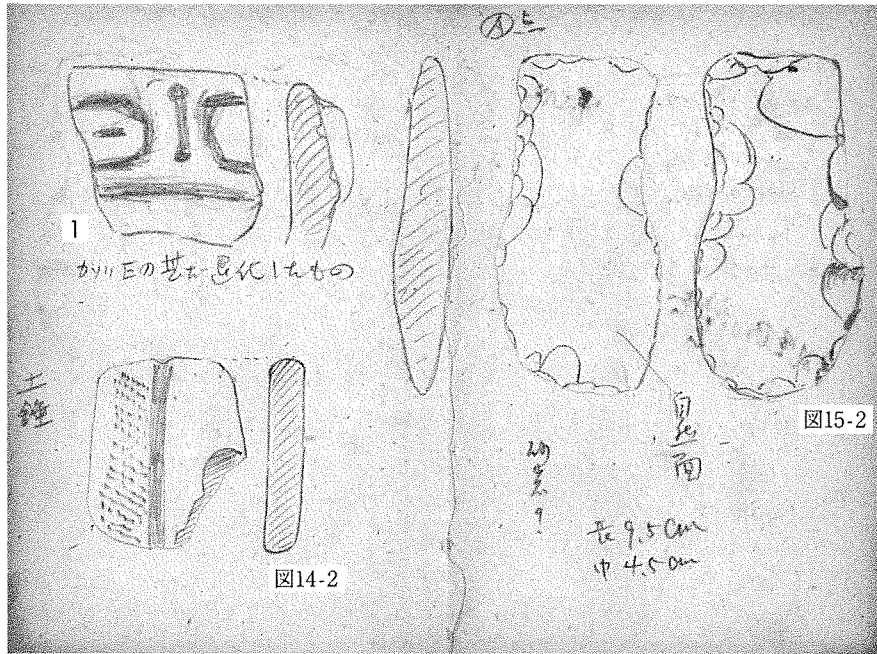


p.38



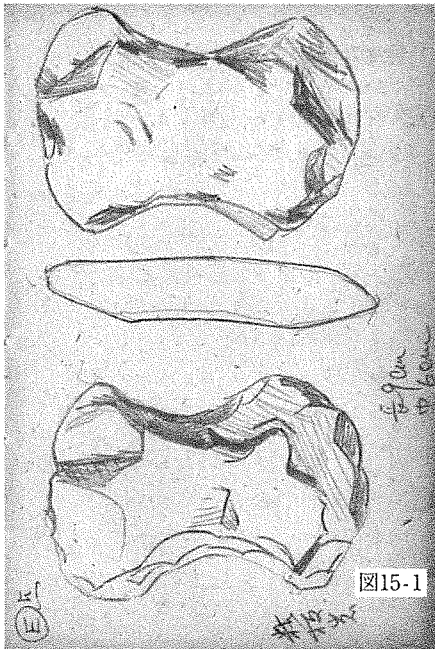
p.39

図 25 赤星直忠の薬王寺貝塚調査野帳 (神奈川県教育委員会所蔵) (4)

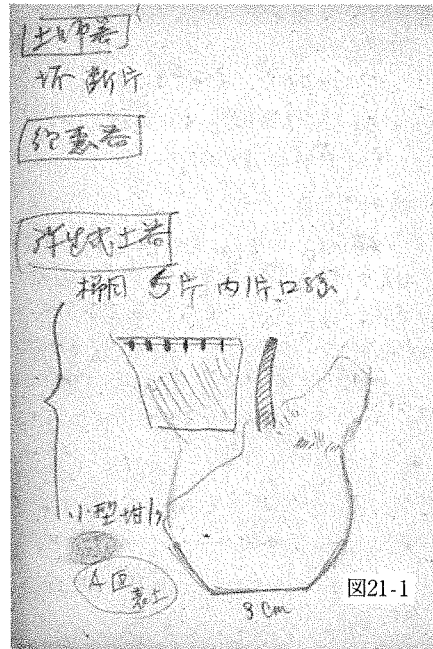


p.40

p.41

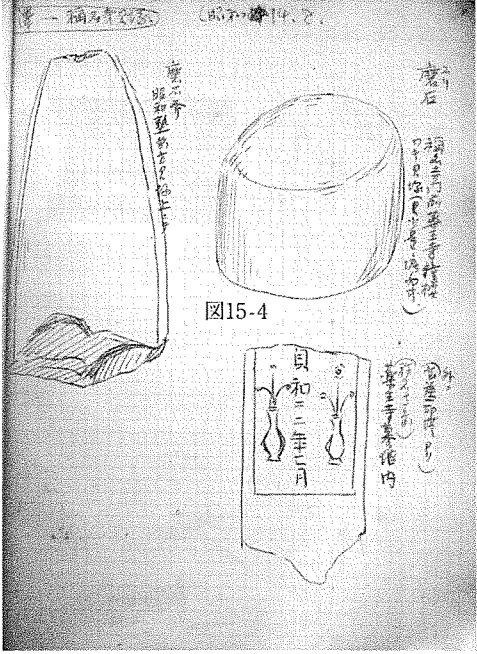
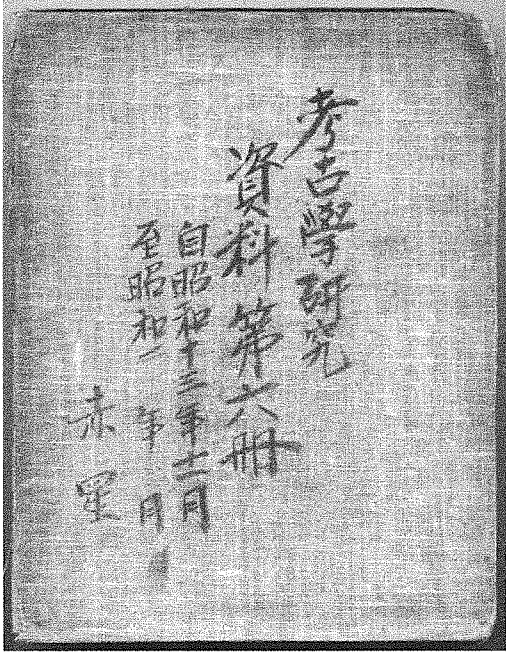


p.43



p.44

図 26 赤星直忠の薬王寺貝塚調査野帳（神奈川県教育委員会所蔵）（5）



表紙

図 27 赤星直忠の調査ノート（赤星直忠博士文化財資料館所蔵）